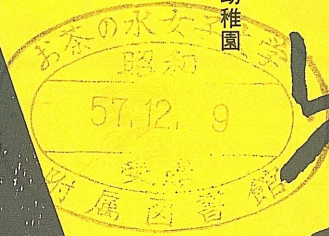


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教玄月



第八十二卷第一号
日本幼稚園協会

1

お茶の水女子大学図書

昭和59

166735

保育者への推薦図書!!

好評発売中!!

これからの保育(全6巻)

●あなたの保育を深め充実させます。●大場牧夫・海卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗 共著

A5軽装版・各256頁・セットケース入り **セット定価 9,600円**

「保育」を原点にもどして考え直し、子どもたちの自主性の発達を助けたい。自由に生き生きとした保育を目指して保育者自らも高まりたい。

内容一覽

第1巻〈これからの保育1〉

「遊び」とは何だろう

- 1章 遊び遊びというけれど
 - 2章 遊び・学習・仕事・労働
 - 3章 お遊びと遊びのちがい
 - 4章 遊びに課題は不要?
 - 5章 遊びと生活環境
 - 6章 遊びを育てる保育者
- (付録)フレーベルのとらえた遊びとは

第4巻〈これからの保育4〉

「生活」とは何だろう

- 1章 子どもたちの生活をみつめる
- 2章 園も生活の場所
- 3章 子どものための子どもの生活
- 4章 子どもの生活をつくるために
- 5章 感動ある生活を求めて
- 6章 園・家庭・地域そして生活
- 7章 保育者の生活感

第2巻〈これからの保育2〉

「自由」とは何だろう

- 1章 保育者の好きな自由ということば
- 2章 自由という名の不自由保育
- 3章 くさりにつながれた子どもたち
- 4章 自由についてもう一度
- 5章 子どもの発達をみつめながら
- 6章 遊びの中の自由とは

第5巻〈これからの保育5〉

「集団」とは何だろう

- 1章 個と集団について考えよう
- 2章 園という集団の中で
- 3章 まず、個からはじめよう
- 4章 型にはめない集団づくり
- 5章 問題児というレッテル
- 6章 問題児を生む保育者

第3巻〈これからの保育3〉

「課題」とは何だろう

- 1章 課題について考えよう
- 2章 大きな課題と小さな課題
- 3章 子どもは課題をどう受けとめるか
- 4章 遊びから課題、課題から遊びへ
- 5章 大切な家庭との関係プレー
- 6章 受身にさせない課題の与え方
- 7章 子どもの生活の中から

第6巻〈これからの保育6〉

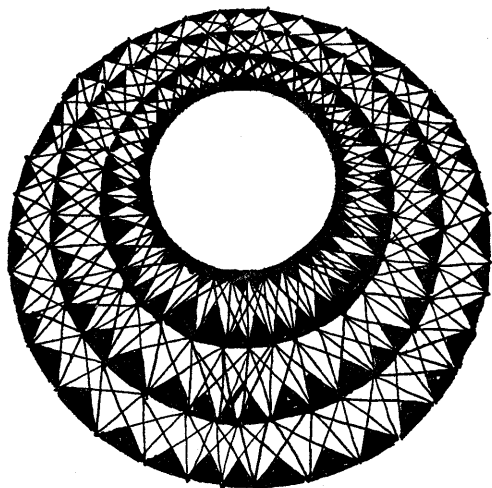
「総合」とは何だろう

- 1章 総合のとらえ方、考え方
- 2章 総合活動と子どもの要求
- 3章 広がり、深まり、まとまり
- 4章 総合のとらえ方とカリキュラム
- 5章 保育の中の総合活動
- 6章 系統と発達のすじみち
- 7章 保育の流れと系統性

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

幼児の教育



第八十二卷 第一号

幼児の教育 目次

—第八十二卷 一月号—

© 1983

日本幼稚園協会

一九八三年の年頭に

—下降する時代の保育を考える—……………津守 真……………(4)

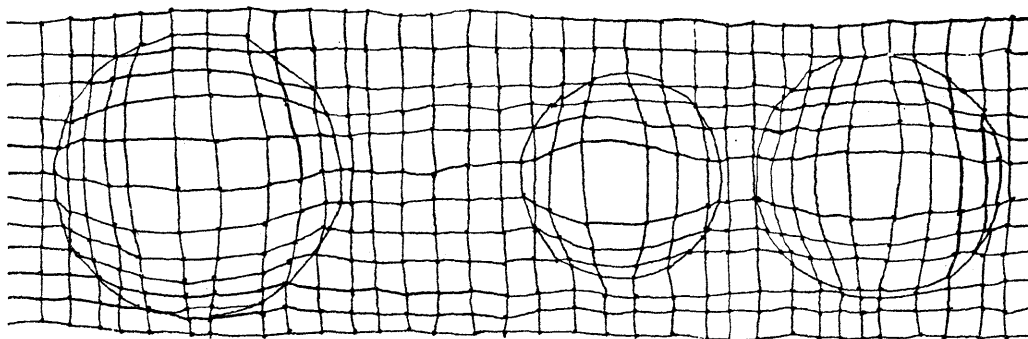
幼児教育の本質が問われるとき……………秋山 和夫……………(8)

一九八三年の保育に向って……………河井多喜子……………(12)

地球・星・子午環……………近藤 雅之……………(14)

「私の幼児教育論」……………真行寺 功……………(17)

近代短歌に現われた子ども(七)……………大塚 雅彦……………(24)



おめでとうございませう……………永井正子…(32)

エリクソンと幼児教育 (13) ……………仁科弥生…(34)

ブリュエールの「子供の遊戯」(9)

——「私の青い塔の中に誰がいるの」から
「泳いだ後で」まで……………森洋子…(43)

史料紹介

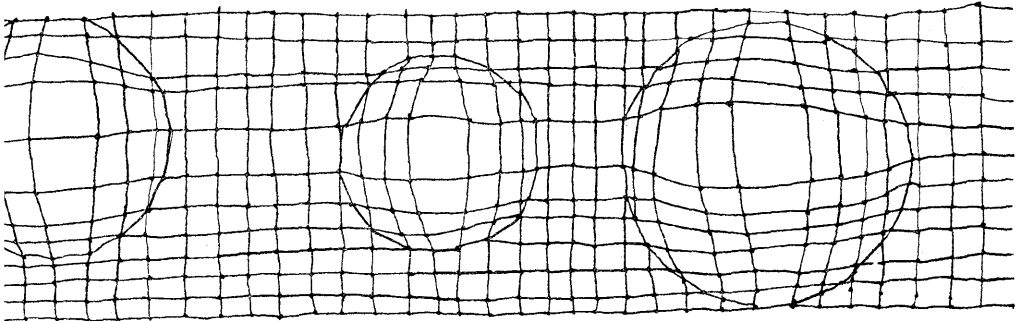
『邦訳 日葡辞書』⑩

——わが国中世の児童文化史研究によせて……………(58)

表紙 織茂 恭子

表紙題字 比田井和子

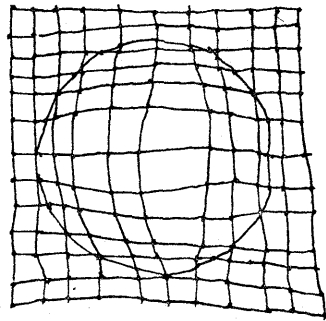
カット 福田 理恵



一九八三年の年頭に

——下降する時代の保育を考える——

津 守 真



先日、朝日新聞に紹介された、「すまないが、英国は君たちを必要としない」というサンデー・タイムズ紙掲載の記事に、私は強い衝撃を受けた。(昭和57年9月9日付)その記事の上部には、人が列をつくって歩いてゆく姿のイラストが描かれている。誕生

——競争——試験——職業訓練——と説明のタイトル

には暗い世界に吸いこまれて消えてゆくところに目をとめると、若い人の存在、成長の価値そのものが否定されるような気持に陥ってしまふ。かならずしも英国人がこう考えているというのではなくて、欧州の経済状態の現実を示す記事なのだろう。しかし、この記事は、青年に希望を与えることのできない現代の世界の暗さを象徴しているように思う。日本の経済、社会状態は、世界の諸国に比べると良い方だといわれるが、私共の身辺でも、社会の多くの組織体が下降と縮少の方向にあることは否めない。幼児保育界もその例外で

はない。

年頭から景気のよくない話であるが、世界中が不景気と動乱の最中なので、致し方ない。一九八三年は、暗く厳しい世界情勢の中にはじまる。

過去三十年間——それは私の同時代の人々が生きてきた歴史に属するが——日本の社会は高度成長をつづけてきた。幼稚園、保育園もまた高度成長をつづけた。そしてこの数年来、幼児数の減少も伴って、幼児保育界は新たな時期を迎えつつある。高度成長期には当然と思ってきた考え方や倫理が、いまや変更を迫られている。拡大することが良いことだという考え方はいまや通用しなくなり、それを望んでも不可能である。むしろ、以前とは逆に、小さいことの価値をあらためて認識することが必要になってきている。保育施設についても同様だと思ふ。

保育は、もともと、小規模の園でなされる仕事である。園長先生は全部の子どもを知っていて、親たちとゆっくりと相談にのることができ、職員たちもたのしんで保育のあれこれ話し会える、そのくらいの規模

ではじめてなしえられるのが保育の仕事である。規模を拡張することが仕事の成功を示すという考えは、本来、保育の世界では通用しないことなのである。高度成長期は、大きな幼稚園を数多く生んだ。いまや、この時代に、大きな幼稚園はいままで規模を維持しようとして、敢て小さくなってほしい。現実に私共の周囲で、経営が成り立たなくなっているのは、落着いてあたりまえの日常の保育をしている小さな園である。小規模の園が増すことによって、日本の保育は、本当に子どものためのものとなるだろう。

高度成長期の拡大の思想とそのため勤勉の倫理の裏には、しばしば無限に増大する欲望の追求がある。勤勉の徳は、個人生活でも社会生活においても、生活の向上に役立ってきたし、今後も重要な徳でありつづけるであろう。しかしそれが無限に増大する人間の欲に奉仕しはじめるとき、どこかで美徳が悪徳に変わる。そして本来美徳であったものが、人間らしさを喪失させる源にもなる。現代の青年は、すでに壮年期を経過した私共よりもそのことを知っているように思える。研究者を志しているある青年は、貧しい生活をす

るのに必要な最低額を計算して、それ以上は敢てアルバイトをしないように注意していると語ってくれた。落着いた学びの時間を犠牲にしてアルバイトを拡大させたならば、精神生活の低下になることを若者は知っている。保育施設の経営においても、いままでとは違った発想と倫理があるのではないだろうか。子どもも職員も、人間らしい交わりと落着きを中心にすえて、毎日をたのしめるようにしたい。

周囲の社会、経済状況がいかに緊迫し、厳しいものになろうとも、そのことは、毎日の保育者の子どもとの応答の仕方を変えはしないし、子どもの生活がそのために変わるものではない。保育の営みは、どんな周囲の情勢の中でも、子どもとおとなとの間にたゆまずにつづけられてゆくものである。保育者にとっての課題は、子どもが今日を充実して過すのにはどうしたらよいかを日日工夫することである。それはたのしみながらなされることであるけれども、子どもにとっても保育者にとっても、一日は、新たな世界を開く冒険である。決して常識にだけ従ってなされるものではない

し、きめられたカリキュラムやプログラムを遂行することによってなされるものでもない。保育者あるいは教育者の生き甲斐は、日常の生活の中に、子どもと共に敢て小さな冒険を試みるころにあると思う。教師の職は、現代においては最も安定した職業になったために、子どもの生活も、きめられた枠の中で無難に過せばよいという気風を生んでしまった。その陰には、子ども自身の発想も、成長するエネルギーも生かされずに、納得のゆかない生活を強いられて悩んでいる子どもたちが数多くいる。このことは幼児のみでなく、小中学校、高校、障害児教育いずれにも共通のことである。教師の待遇の改善は重要であるけれども、教師の本領は、安定とは逆の冒険にあると思う。たえず、真の教育とは何かを問いつづけつつ歩みたい。

保育の現場の実践は、周囲の社会情勢の変化とは関係なく日日つづけられてゆくが、暗く厳しい社会の課題は、実践する保育者、また経営者、管理者のもうひとつの肩の上に、重くのしかかっている。不況の時代、下降する社会、崩壊の危機に立つ組織の中にあっ

て、子どもを保育する人間らしく生きつづけ、幸いにも生きのびることができたなら、それこそが次の上昇期への基盤となるのではないだろうか。いささか極端な場合を念頭において考えすぎているかもしれないが、二十世紀末の幼児保育関係者は、程度の差こそあれ、似たような立場に立たされるのではなからうか。この時期にこそ、保育が本当に子どものものとして地についたものとなりうるのだと思う。もしもこの時期に、高度成長期と同様に、表面的な拡大を追い求めるならば、時代錯誤となるのみならず、人間を破壊するものとなりかねない。下降する社会の中に生きること、をむしる誇りとし、この時こそ真に人間となることのできる時代と考えたい。

十九世紀の世紀末に記されたリルケの日記の中に、「私に与えられた人生を優しく愛し」「そして心の奥深く、わたくしに属するものすべての可能性を成熟させ」と云っているところがある。(リルケ 森有正訳「フィレンツェだより」筑摩書房 P 96) 下降する時期

には、重苦しい悩みが多いが、それを受身になって悩むのでなく、そこに与えられた自分の人生に優しい眼を向けるとき、受動の悩みは能動の喜びに変えられる。そして心の奥深くにある己れの可能性を成熟させることができるとき、人間は物質的には貧しくとも、精神的には上昇する存在となるだろう。

戦後の日本は、「文化国家」の建設を目指して立ち上った。私の青年時代である。その後三十年、日本は目覚ましい復興をしたかのように思われたが、真の文化をつくり上げるのは、実はこの下降する時代を待ってはじめてなしえられる仕事のようだ。そして、文化としての真の保育が形成されうるとするならば、それはこれからの下降の時代である。子どもが生き甲斐をもって充実した生活をできる保育の小さな現場がひとつでも増すならば、暗い社会はそれだけ明るさを増すのだと思う。

幼児教育の本質が問われるとき

——一九八三年幼児教育の展望——

秋山 和夫

幼児数の減少と幼児教育界

「幼児教育の本質は何か」といった問いかけや、「保育内容の質を高める」ために、どのようにしたらよいかといったことの検討は、いまに始まったことではない。

これらの問題は、古くして新しい課題であり、永遠に問いつづけられなくてはならない課題であろう。

しかし、これらの問題が今日的な課題として真剣に考えられなければならない理由は、幼児教育の性格や、その方向性がきびしく問われているからである。単なる理念のレベルで、あるいは、理論的な関心にもとづいて行われる検討であれば、それが直ちに実践を規定すること

はない。

ところが今回の場合は、乳幼児人口の減少という事実の中で、幼稚園や保育所の子どもの定員が充足できなかったり、幼稚園や保育所相互の間で、各園が定員をうめるために、園児の獲得競争も行われているという、深刻な事態がその背景にある。少し大げさな言い方をするならば、園そのものの存在がゆさぶられているともいえるのである。

幼稚園や保育所の受け容れ定員数の方が、入園を希望する幼児数を上まわることになれば、親は幼稚園や保育所をかなり自由に選ぶことができる。そのためにも、幼稚園や保育所の保育内容の質が問われることになる。大

きな定員割れをおこさないこと、そのための保育内容の質の向上といったことは、園の経営という現実的な立場からの切実な要請になってきている。

良い保育とは何か

わが子を、良い園に入れて、より良く育てていきたいというのは、親に共通した願いであろう。また、幼稚園、保育所関係者も、より良い保育を行って、子どもたちの全面的な発達を保証してやりたいと願い、そのための努力を続けている。

このように、「より良い保育」を求めている点においては、親も保育者も共通している。しかし、どのような保育がより良い保育であるのかという点になると、親と保育者との間で意見が一致しているわけではない。また、保育者相互の間ですら、その点についての意見の一致は求めにくい。これは、親のエゴイズムが表面にでてくるからだとか、保育者が怠慢だからといった理由によるものではない。

むしろ、良い保育とは何かについての理論的な研究が十分でないからだ、といった方がよいのであろう。理論的な研究は、多くの場合、実験室の中でのある特定の観測に立脚した研究であったり、幼児の発達を考えるための前提としての基礎的資料を得るために、ある特定の能力の学習可能性を追求する研究であったりする。

人為的な実験場面での研究、ある特定の能力についての学習の可能性を明らかにするような研究が必要なことは言うまでもない。それと同時に、ボッサード (T.H.S. Bossard) などが提起しているような、場面情況的アプローチ (Situational approach) が研究方法論として取り入れられる必要がある。そこでは、子どもの自然な活動場面で、子どもの興味や意欲をしっかりと把握、子どもの活動の様子を把握することができるからである。また、学習の可能性の追求のみに止まらず、教育の妥当性の面からの研究が、もっと理論的になされる必要がある。こうした研究の中で、子どもにとって望ましい保育とは何か、ということが解明されていくのであろう。

現在では、幼児期における学習の可能性がずっとつきつきと解明されてきている。「0才児でも訓練すれば、これだけのことができるようになる」といった研究や実践が、あたかも、教育の妥当性を示すものであるかの如く、言いはやされている。例えば、零才で泳げるようになることが、乳児にとってどのような意味を持つのか、それがその子どもの発達にとって、どのような影響を及ぼすのかといったことが十分論議されることなく、一般には、物珍らしさで、何か好ましいことではないかといった受け止め方がなされている。これに類した事例は枚挙にいとまがないほどである。

倉橋惣三が、かつて指摘したように、幼児教育は「猿か山雀にでも芸を仕込んで、見物人を驚かす」ためにするものではない。倉橋がしばしば指摘しているように、子どもの「いきいきしさ」「生活の満足」「自発的生活」を保証するためにどうすればよいかという観点で、保育を構築していくことが必要なのである。

今のような状況だからこそ、前に述べたような観点で

の保育を確立し、子どもにとって望ましい保育とは何か、ということを親に説得していく努力が必要であるう。

幼・保一元化

幼・保一元化の是非が、幼児人口の減少という事実のなかで、より真剣に議論されている。保育クーポン制の考え方を提示したある政治家の発言も、この議論に拍車をかけている。

現実には、幼稚園の保育時間の延長の傾向、保育所の幼稚園的運営といった傾向が見られ始めている。幼稚園と保育所が、はからずも現実面で歩み寄っているといえるのである。

幼・保一元化の理念は実現されるべきだと私は考えている。しかし、それを実現するためには、現実的に処理されなければならない問題が山積している。幼稚園の本質、保育所の役割は何であるのか、それらは、子どもにとってどのような場所であることが望ましいのか、とい

った基本的な事柄についての理論的な検討が必要である。さらに、文部省、厚生省に分れた幼児保育についての二元的行政をどうするのか、その他行財政上の問題が山積している。

幼・保の一元化は、子どもの立場に立つてこそその必要が存在するのである。おとなや、園の経営者や行政関係の人々の必要から、あるいは、経済的な理由からす定められるべきものではなからう。現実におすすめられている幼稚園の長時間保育、保育所の幼稚園化といったものは、誰の必要に基づいてすすめられているのであろうか。

小学校との関連

幼稚園・保育所を経て、小学校に入学する児童は、ほぼ九〇パーセントに達している。このような現実の中では、幼稚園・保育所の保育内容が、小学校教育とのかかわりで問題にされることが多くなってくる。小学校入学準備のための保育内容というものが、あるのかどうか。

また、最近の子どもの発達加速化現象とのからみで、幼・保の保育内容が問題にされている。

この場合に大切なことは、あくまでも子どもの立場に立ち、幼児教育の本質をふまえた検討がなされることである。

おわりに

これまでに見たように、幼児教育の世界には解決を迫られる多くの難問が山積している。しかも、これらは、幼児教育の本質と深くかかわるものばかりである。このような状況の中で、倉橋惣三によって策かれた幼児教育の伝統が正しく評価され、その精神が保育界の指導力となることが望まれる。

一九八三年は幼児教育界にとっては多難な年である。それだけに子どものしあわせを実現するための幼児教育についての研究や実践が、拡がりを持って深められていく必要がある。

(岡山大学)

一九八三年の保育に向って

河井多喜子

右方に富士、左方に三浦半島、正面に伊豆大島をのぞむ鎌倉の海で、おさなごたちは、きらめく陽を浴びて、喜々として、波に戯れ砂にまろぶ。

波がしらはくだけで、さーっと、岸边に寄せてはかえして……。

幼児教育も経営面、教育面、その他いろいろな面に、

大波小波が寄せてはかえし、集中拡散を繰り返す。

教育とは？

次代に何を伝え、何を遺せるのか？

世界へむかう意識を育てるのは？

自分には、どのようなことが出来るか？

「私たちは肉体的条件を克服して、内面的なものを他

に及ぼし、美しい姿勢を、子どもたちに見せるのです。」と、老練の教師は、やさしいもの腰と温いまなざしで説かれて、聞く者の胸を打つのです。（世界へむかう拡散の意識に通ずる。）

人生には、いろいろな憂い恐れ苦しみがあり、胸の中では自己との戦いも渦をまく。それらを克服するのに忍耐、思慮、工夫などがうまれ、希望の光がさし、心の自由を得、努力を重ねているうちに、心が通い合う真の友が出来ることを教えていただく。

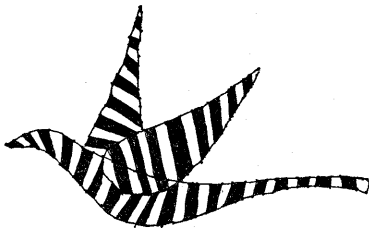
世界中の人々と肩をふれあい、渦をまき、またほぐし、愛をこめて、にっこり身をかわしたりするのは、子どもたちを前にして見出すこと。

人智学的设计と云われる、流れるような、美しい線で結ばれた建築のすばらしいこと、木目も美しい内部のやわらかなイメージ、教師と園児との触れあい、又は児童との温い血の通いあう学習にふれ、心の高まりと同時に

ほぐれるような思いで引き込まれていく。教育の原点である魂の問題は篤い信頼関係によって育まれるようです。

天地自然と人との営み、人と人との交りの中に、信仰、愛、祈りなどを肌で感じ、これを心の糧として教育にあたり、日々の歩みの支えとしたいと思うのです。

（聖路加幼稚園）



地球・星・子午環

近藤 雅之

人は空間と時間の認識を地球に負うている。地球が平面と思われていた時代でも、大地は空間概念を生ずる場を作っていた。メソポタミア以来の天文学史は、空間概念の発展を教えてくれる。空にかかる月は球であると認めても、人の立つ大地を球と考えるには、学問の発達が必要だった。さらにまた、理屈でわかってもピンとこないということさえある。それで、人工衛星がとった地球の写真を初めて眺めたときの名状しがたい感じは、今になおなまなましいのである。

地球は太陽のまわりを一年でまわる。またその間に自身のみを三六五回以上まわる。太陽も星も毎日、東

から出て西へ沈む。星はずっと遠くにあるから、地球から見た方向は変わらない。太陽は一年で三六〇度見える方向が変わるので、星は太陽とくらべて毎日一度ずつなわち時間の四分ずつ早く出て、一年で元へ戻るように見える。しかし星の天竺の位置は変わらないように見える。つまり、いくつかの星のならば覚えやすい星座にすると、星座の形はいつも同じである。星は変わらないという意味で恒星とよばれた。

天文学者は恒星の位置や明るさを調べて記録することをはじめた。星の位置を本格的に測る器械を子午環という。東西に固定された軸で支えた望遠鏡で、南北の方向

だけ自由に向くようになっていく。これで南北線（子午線）を通過する星の高度と通過時刻を読みとる。子午環で基本星の位置を決め、それをもとにしてほかの星の位置を求めてゆく。こうして数多くの星の位置のカタログが作られた。

時刻はもともと振子の等時性をもとにした時計で測られてきた。機械的な時計の等時性を検定するのが、天体観測で行われてきた。つまり時計のズレをなおす役目である。地球の自転は等時性のよい見本であった。

恒星が言葉通りの恒常な存在でないとわかったのはかなり古いことである。明るさが変わる星が見つかったのは一六世紀の末年である。星が無限に遠いものでないとわかり、距離が測られたのは、一四〇年ほど前である。星の位置が変わるのを見つけたのは、彗星で有名なヘレードである。つまり、星はほかの星から決った相対位置に見えるのではなく、時間が経てば動いてしまうものなのである。それでは星の位置を測るのは無駄かという点、そうではない。時を経て知られる星の位置の変化は

固有運動とよばれ、銀河系の研究に大いに役立つのである。だから子午環の観測も続行されて、何年おきかに精密な基本星表にまとめられる。

時刻の基本にされてきた地球の運動も複雑なものである。たとえば、自転のほかに、極運動というようなものがある。地球の自転軸が、地球のなかで軸の位置を変えてゆく現象で、岩手県水沢の緯度観測所は、これを長い間、観測している。技術の進歩はあらゆる面で著しいが、戦争前の振子時計は、水晶時計、原子時計と変わってきた。現在原子時計の時間秒の標準に使われているのは、セシウムのある遷移の光の振動数を逆数にしたものである。ところでこれに至って、等時性の精度が地球の自転を凌駕した。もちろん星の位置観測を続けてわかったのだが、地球の自転がガタツとするのが見られたのである。こうして原子時計の発展とともに、天文台は時を保つ役目を原子時計に譲り、かわりに地球の運動を調べることになった。

地球の自転がこれほど衝撃的でなく変わるのとは前から

知られていた。月や太陽の潮汐作用によるもので、海水の摩擦がきく、特にベーリング海峡の値が大きいなどきかされた。地球が生きた変化のあるものだということは、こんな迂遠な現象でなくて、地震とか火山を見れば誰にもうなずけよう。近年の地球に関する学問の進歩は、われわれの足下のマントルが徐々に移動してゆくのを発見した。地震も、少くとも一部がこれが原因となつて起こる。地球は生きているのである。

地球上の岩石の組成を調べ、二種類以上の放射性元素を定量することで、岩石の年齢を知ることが出来る。こうして知られた地球の年齢は約四五億年であった。恒星が変化するものとわかったのち、天体の一生（これを生物学の用語を借りて進化といっているが）を考えたのは今世紀になってから、さらに今日的な進化論は、ほぼ大戦後のことである。太陽系の進化も、いま新たに描かれつつある。カント、ラプラーズ以来のお話が実証的に固められつつある訳である。

天文学的でも地球の学問でも、いろいろの探求の仕方

がある。なかには随分短い時間の変化を扱って、現代のエレクトロニクスの進歩でやっと出来るようになったこともある。しかし、星や地球の一生は悠々たるものであり、長期にわたる測定の積み重ねが大事なことも多い。先にのべた子午環の位置観測などはその代表的なものである。三鷹の東京天文台では、最近新しい子午環が完成した。今までの器械は、一九二六年から使われてきた。こういう観測は同一器械で続けることにも意義があるので、やむを得ず古物を使ってきた訳ではない。しかし、対象をより暗い星に拡張したい問題意識の進展と、急激な技術革新は、新しい器械の導入を必然にした。都市化の進んだ三鷹の空は第一次石油ショックの頃、非常に悪い状態になったが、今は当時よりずっとよくなったようである。東京は晴夜の数は日本のなかで良い方である。周囲の暗い状態がなるべく保存されることを希望としつつ、晴れている夜はいつも観測が続けられているのである。

（東京天文台）

「私の幼児教育論」

「私の幼児教育論」は「私の幼児教育」論とも、私の「幼児教育論」とも受け取れる。常識的には後者の意味であろうが、「私の幼児教育」を機会があれば振り返ってみたいと以前からおもっていたので、前半をそれに割かせていただくことにする。これは私の「幼児教育論」に密接に結びついているとおもわれるからである。

私は東京の亀戸天神の近くで生れ、小学校二年の終りまでそこで育った。小学校に入るまでの二年間、近くのミッション系の幼稚園「愛清館」で保育されたが、そこ

真行寺 功

での出来事の数々は今でもかなり鮮やかに想起できる。もちろん園での生活の総てを記憶しているわけではなく、逸話的な出来事だけであるが、それらは幼児期の私にとって強烈な刺激であっただけでなく、そのときどきの私にとって極めて深い意味があったとおもわれる。この意味という点から考えると、それらは一幼児の私的体験の次元をこえて、幼児そのものの世界と心理を端的に物語る貴重な資料ともなりうる。

大きな積木で小屋をつくり、その中に入ったときの驚

きと興奮。叱られて、罰に薄暗い物置に押し込められ、叱られた原因も理由も忘れて、ただもう眼を大きく見開いて辺りを見まわした時の恐怖感。園舎のコンクリート壁と庭の芝生の間に蠢くさまざまな虫。丸くなったり、びよんと跳ねたり、お尻からなにやら煙りをはいて逃げたり、それはもう好奇心を満足させるのに十分な存在だった。椅子ごと後ろに倒れてスチームの放熱器に後頭部を打ちつけ、血だらけになった隣の子。その放熱器の上には弁当箱がならんでおかれてあった。それ以来、尖ったものを見るとゾッとするようになった。クリスマス劇やプレゼントも覚えている。また、他の子は「キングダーブック」を先生からもらって帰るのに、どうして自分にはもらえないのか、いつもその度に悲しく、淋しい気分になったものだ。

また、幼いながらに特別な感情を抱いていた、とても可愛い女兒がいた。髪がちぢれていて、昔の人氣子役のテンブルちゃんに似ていた。父親は外資系の石油会社に勤めていて、社宅に遊びにいくと、会社の構内には銀色

の大きな石油タンクが幾つもたっていて、とてもハイカラな雰囲気を感じられた。その子が突然ある日から姿を見せなくなった。父親の転勤で遠くへ行ってしまったとのことであった。そのことを知ったとき、その子がどこか遠く暗い闇の中へと消えていってしまったようで、とても淋しかった。

しかし幼稚園でもっとも印象深い出来事は園で怪我をしてひと月ほど入院したことだった。園の庭と通路を仕切る、高さ一メートルの金網のフェンスから跳びおりたとき、ふと脚を見ると、ふくらはぎの皮がめくられて肉が見えているではないか。出血も痛みもなかったが、これはただごとではないという不安から大声で泣きだした。友達が寄ってきて覗きこむ。やがて先生がやってきて、私を抱きかかえると職員室へ運び、傷口に油紙を当てて包帯を巻くと、先生はしっかりと私を抱いたまま、母が来るのを待った。

母が来ると三人でタクシーに乗った。途中まではいつも通る、見慣れた町の家並が車の窓越しに見えたが、家

へ曲る角を曲らずに通り返したとき、私は急に、これから何か恐ろしいことが起るような予感がして、不安になり、怯えたように「お家に帰ろう、お家はあっち！」と叫んだ。母はしきりに私を宥めて何かいっていったようだが、何をいったか覚えていない。家とは異なる方向へと私を引き裂く車。反対に町の家並は私の家の方へ飛んでいくではないか。

病院に着いてから手術まで、待合室で長く待たされたが、その間中ずっと母の膝を枕に長椅子に横になっていた。薄暗い待合室の絵が、他の患者すら、私にこれから何か仕掛けてくるようで恐ろしかった。それは手術のときに現実となった。数人の看護婦と母が私の手足を押えつけ、医者は私の細いふくらはぎの皮を引っ張って十二針も縫った。私は大暴れに暴れたが、到底はねのけて逃げることができない。私は何度も叫んだ。「死んじやうよう！ 医者のパカヤロ！」

母は「これが終わったらおもちやを買ってあげるから」と繰り返し、私を静かにさせようと努めた。責苦の中に

あってもそうした母の言葉は不思議とよく覚えていて、後で「あのときああいった」といっては母を困らせたように、退院する頃には、おもちやが幾つも枕元にあつた。

以上ははっきりと想起できる幼稚園時代の経験の一部であるが、幼児期の子どもは心理の特徴がよく現われていて興味がある。幼児の世界は狭く、自分の家から徐々とその世界は拡がり、いつでも危険が身に迫れば、その世界の要へ戻る様子が見てとれる。おとなは常に子どもを保護し守ってくれる者としてしか現われてこない。また幼稚園で先生から教えられたこと、説明や忠告、命令なども記憶にあまり残っていない。特に、これまでの発達心理学の研究からも明らかのように、概念的思考を必要とする事柄についての記憶は殆どない。しかし幼児期の経験を通して開発しないしは解放された何か（学習したとはいえない）が個人の生涯にわたって決定的な影響をあたえることはよく知られている。

例えば、太平洋戦争が激しくなった頃、中学生だった私は、ある人から疎開荷物の中から本を一冊あげるから、どれでも好きなものをとってよいといわれたが、手にしたのは注解つきの聖書だった。確かにミッション系の幼稚園でキリスト教に接したが、家族がキリスト者でもなく、教会に出入りしていたわけでもない。明確な意識をもってその本を選択したわけではなく、何故か理由もはっきりしない。戦争のもたらした苦痛から逃れるためだったのかもしれない。誇大に言えば、アウグスチヌスの「取りて読め」に似た経験であった。これを説明するに下意識とか潜在意識をもってすることも出来ようが、それは単なる心理学的分析をこえた問題のようにおもわれる。ここで私は何か概念的認識によらない、情緒的、欲求的認識による理解について考えざるをえない。

つまり概念や言語によらない認識についてである。しかもボディ・ランゲージなどのような、いわゆるノンバーバルなコミュニケーションによるものでもない。これは古くからいわれてきたことだが、現代では殆ど忘れられ

た問題である。つまり適合性 (connatuality) とか傾向性 (inclination)、親和性 (affinity) とよばれるものによる認識についてである。

中世の哲学者、トマス・アクィナスによると、感覚的欲求の働きと似た適合性という認識の手段が考えられる。これは理論的知的認識ではない。例えば倫理的問題について判断するとき、倫理学に詳しい者は学問的に正しい判断を下すだろうが、そうでない者はどのように判断するかといえば、適合性によるといわれる。よくいわれるように、「道徳」の成績のよい者が道徳的によいかといえば、必ずしもそうではなく、成績の悪い者が善い場合もある。このように学的認識によらずに判断を下す場合、それは判断の対象となっているものに対する適合性に基づくといわれる。しかもこれは情念としての愛として感覚的欲求の働きとされ、これによって知性は対象との情緒的一致を通してその対象の本質と接触し、それを捉えるのであって、概念によるのではない。したがってこの場合の知的認識の内容も直接的には概念的に表現

されない。このように理性による認識の一致が困難な対象についても完全な情緒的一致を媒介としてその本質の認識に到達することができる。この適合性による認識は決して価値が低いということではなく、むしろ人間学的には重要な意味をもつ。つまり宗教や形而上学的、美的認識、道徳的判断などにおいてはこの適合性による認識が主であるとさえいえる。また自然法の認識も適合性によるものだともいわれている。このようにして認識は理性による学的認識のみならず、また適合性によるものもあることを認めなければなるまい。現代では、理性的科学的認識のみが正しいものとされ、他は主観的として一切排除される。これと関連して次のことも知らなければならぬ。西欧の伝統的考え方として知的働きに大別して二つある。理性 (reason) と知性 (intellect) である。前者は概念操作によって比較考量する働きであり、後者は直観的全体的に認識する働きであるが、近世以後その区別に混乱が生じた。カントにおいても両者の働きが転倒し、理性 (Vernunft) と悟性 (Verstand) として認め

られているが、現代では、特に心理学においてはその区別はなくなり、知能という観点から捉えられている。そしていわゆる科学的認識を最高として、それへむけて教育することが主流となっている。しかも幼児期からそうした教育がなされているところに問題がある。月の世界にはもう兎はいない。駱駝にのった王子さまもお姫さまもない。そこは砂と岩石だけである。もはや太陽も昇ったり、沈んだりしない。地球が太陽の回りをまわっているだけにすぎない。こうした傾向は子供達をメタリックな無感覚に陥れるだけである。

ここで私は人間の知的働きについて再考を促し、その教育について考えることが必要だといいたい。では上述の適合性による認識を育てるにはどうすべきであろうか。それはまず、安定した家庭環境のなかで子供が安心していられる、保護された雰囲気が必要であり、そこを足掛りとしてできるだけ多種多様の経験をさせること、そしてなによりも想像力を豊かにすることが大切である

う。またこの想像力に基づいて直観力を開放することも重要であるが、これらはかならずしも概念や言語をもちいる必要はない。従って幼稚園での指導としては遊びなどではそうした想像力を育てる方向でプログラムをつくるべきだろう。たしかにそれほど意識的にしなくとも幼児はすでに想像の世界に住んでいるからそのままでもよいのではないか、とかんがえられるが、現在の幼児をとりまく世界はますます大人化し、事実以外のなものでもなくなっているので、やはり必要かとおもわれる。

また、自然の観察の際にも、ただ事実を忠実にみるだけでなく、たとえアニミスティックといわれても、共感や感情移入をどしどし取り入れるべきで、ぬいぐるみや人形劇などだけでなく、さらに砂や石といった無機物から身の回りの日用品、家具、さらには宏大な空、雲、星、月にいたるまで、総て見えるものも、見えないものも、ありとあらゆる在るもの (being) を擬人化し、自らも擬物化や擬動物化することが大切だとおもわれる。ある時は雲が怪物になり、ある時は自分が虫になったり、

箒になったりすることもよい。こうすることによって、つまりいろいろな在るもの (being) をある仕方を経験することによっていのちの優しさやこの世界で最も根源的な存在への感受性が育つのである。そしてこのいのちの優しさと存在への感受性とは人間存在の最も根源的な資質と考えられる。これによって平和を愛し、隣人に心を配り、謙虚に生きることができるのである。こうした優しきや感受性は想像力の発達する幼児期に芽生え、育つことを考えれば、そしてまたこれが概念的思考の基礎にもなるのであれば、保育目標の第一に挙げられるべきものとおもわれる。

J・マリタンも育成さるべき基本的性向の一つとして存在 (existence) についての単純な (simplicity) あるいは開放性 (openness) を指摘している。彼はこの性向を自ら存在することを喜び、存在することを恥としない、存在において毅然とたつ存在者の態度という。これはいわばはからのない無心な、総てにたいして開かれた態度といえよう。しかしこれはあくまでも目的であっ

て、容易に達しうるものではないが、少なくとも幼児期にその基礎が築かれるといえよう。こうした総てに開かれた態度は同時に総ての可能性にも開かれており、その意味で他者の在り方にたいしても深い理解をもち、その可能性の実現を希望するものである。

要するに、知的認識には理性的学的認識と情緒的欲求的認識とがあり、後者は前者におとらず事物の本質的認識が可能である。そして時間的には後者が先立ち、幼児期からの育成が望まれ、実際には想像力を十分に発達させることによって可能となる。またそれはとくに存在についての認識として、しかも人間学的な認識として前概念的・前言語的・幼児期より機能しているもので、後年になってから理性的学的認識が優勢になると、前意識的ないし下意識的なものとなるものであり、個人の生活の根底につよい影響を与えている。具体的にはそれは分離不安や危険、明暗、光と影、ものの生成消滅、死、その他の存在のもつ諸属性を経験することによって発達すると考えられる。従来は存在といえば形而上学や存在論にお

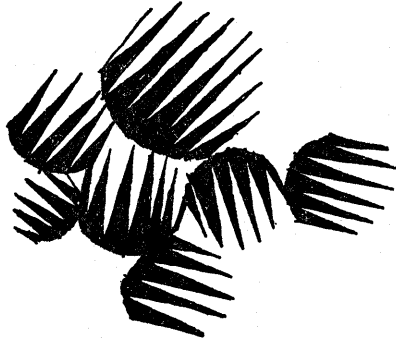
いて論じられる問題として専ら理性的学的に論じられてきた。最も抽象度が高いから理解が困難であるため、一般には敬遠されてきたが、それはむしろ時間的には後でも、本質的には先で、意識はされていないものの、すでにそれは機能しているとおもわれる。そうした認識能力の育成はまた知能障害児の理解と教育にとって重要な意味をもっているとおもわれる。

参考文献

- 稲垣良典：トーマス・アクイナスにおける適合性 (connaturalitas) による認識 「中世思想研究」 No. 1、中世哲学会、昭和33
- J・マリタン、溝上茂夫：人間教育論 創文社、昭和29 (Education at the Crossroad, 1943)
- (Pour une philosophie de l'education, 1959)
- (金沢大学)

近代短歌に現われた子ども

(七)



大塚
雅彦

(13) 齋藤茂吉

昨年（昭和五十七年）は齋藤茂吉生誕百年ということ、茂吉の生誕地の山形県上山市かみのやまを始め各地で記念講演会や齋藤茂吉展（例えば東京では小田急デパートで）等の催しが行われた。近代歌人の中では恐らく茂吉は最も愛され親しまれる存在である。例えば高校の教科書に採用されている短歌の数で、茂吉のそれは近代歌人の誰よりも多いのではあるまいか。

彼は明治十五年、山形県南村山郡金瓶村かみへ（現上市）の農家守谷家もりやの三男として生まれた。私は数年前此処を訪れて、守谷家の当主であった広吉（茂吉の長兄）の令息夫人に逢ったことが

あるが、いかにも素朴なおばあさんという感じであった。茂吉もまた、小学校を卒え上京して、親戚の斎藤紀一家の養子となり、東大医学部を卒業し、紀一の次女である子と結婚し、養父の建てた青山脳病院の院長となり、欧州留学をし、精神科医を本職とした近代人であったが、死ぬまで、東北農家の子としての農民性や素朴さを失わなかった人として知られている。

短歌は、旧制一高生のときに、正岡子規の『竹の里歌』を読んで作歌に志したというが、伊藤左千夫門に入り、「馬酔木」を経て「アララギ」の幹部、中心的存在として活躍し、疎開先の郷里から帰って昭和二十八年二月、東京の自宅で没するまで、生涯にわたって作歌し、合計十七冊の歌集をのこした。そのほか柿本人麻呂や源實朝あるいは近代短歌史や近代歌人たち等に関する研究、その持論とした写生説に関する理論、滋味溢れる隨筆など、多くの著作を世におくり、その膨大な全業績は斎藤茂吉全集全五十六卷（昭和27〜32。なお、第二次全集も昭和48より刊行され、この方は全三十六卷）として

のこされている。茂吉に関する研究もこんにちさぶる進んでおり、伝記研究では柴生田稔、本林勝夫、藤岡武雄の諸氏を始めとする研究家によって次第に茂吉の生涯が明らかにされ、また、作品の研究、解説、鑑賞や、茂吉が一応完成した短歌写生説の理論的解明等も進められている（私自身も茂吉研究の様相をまとめて展望したことがある。拙稿「茂吉研究史付文献目録」——国文学解釈と鑑賞」昭和44年4月特大号（斎藤茂吉Ⅱ人・生活・文学特集号）所収）。

- ①平凡に堪へがたき性の童幼ども花火に飽きてみな去りにけり
- ②くれなるの獅子をかうべにもつ童子もんどり打ちてあはれるかも
- ③押し入にひそむこの子よ父われのわるきところのみ伝はりけらし
- ④あはれあはれ電のごとくにひらめきてわが子等すらをにくむことあり

①は明治四十二年作で、処女歌集『赤光』（大正2刊）

所収。「細り身」と題する一連の中にある。この歌の前に「病みて臥すわが枕べに弟妹らがこより花火をして呉れにけり」「わらは等は汝兄の面のひげ振りのをかしながらいひ花火して居り」等があるのをみると、作者が病臥している枕辺に、童である弟妹たちが慰めに来て、「兄さんのひげが伸びておかしいな」などとさざめきながら、こより花火（紙をこよって作った線香花火）をしてくれていたのであろう。明治四十二年といえは茂吉は既に二八才であったが、この養家の弟妹は幼なかつたのである。ところがその弟妹たちが、単調な遊びにがまん出来ないらしく、いつの間にか、みんなどこかへ行ってしまった、という歌である。子どもというものは元気なもので、瞬時たりともじっとしていない。私は亡母から「子どもがじっとして動かない時は病気かもしれないから、気をつけなさい」と育児上の注意をよく言われた思い出がある。茂吉のこの歌はそんな子どもの生感、本質を実に的確にとらえていて、私はいつもこの歌を読む毎に感心させられる。なお茂吉にはこの「童幼」という語

の他に、「釋兒」「釋童子」「釋き子」「釋ら」などの特殊な用語を用いた作品が何首かある。

②は大正三年作で、歌集『あらたま』所収。「冬日」と題する一連の中にある。角兵衛獅子を素材にした珍しい作品なので、抄出した。この歌の前に「ふゆ空に虹の立つこそやさしけれ角兵衛童子坂のぼりつつ」という作もあるし、『赤光』の中にも「角兵衛のをさな童のをさなさに足をとどめて我は見んとす」「笛の音のとりほろろと鳴りひびき紅色の獅子あらはれにけり」「いとけなき額のうへにくれなるの獅子の頭を持つあはれさよ」等がある。角兵衛獅子というのは一名越後獅子ともいい、越後の蒲原郡から出て、子どもが紅の獅子頭をかぶり、鶏の尾をつけた衣服を着けて舞い、逆立などを演ずる旅芸であり、②の「もんどり打ちて」は「とんぼ返り」をすること、つまり逆立である。角兵衛獅子を見かけることは最近ではなくなったが、大仏次郎の作品『鞍馬天狗』に登場する重要な子役であり、未だ十三才の美空ひばりが唄ったところの「笛にうかれて逆立すれば、

山が見えますふるさとの、わたしや孤児^{みなしご}街道ぐらし、ながれながれの越後獅子」という哀調を帯びた「越後獅子の唄」（西条八十作詞、万城目正作曲）は、歌謡曲ファンの私には忘れがたい。

③は昭和八年作で、歌集『白桃』所収。「新年」と題する一連の中の歌である。この歌の前に「四^よたりの子そだてつつをれば四^よたりとも皆ちがふゆゑに楽しむわれは」という一首があり、四人の子（茂太・百子・宗吉・昌子）を育てながらの父親としての感懐をうたったものようである。そのうち③の「押入にひそむ」子は昭和二年生まれの数え年七才であった次男宗吉（後の北杜夫）を詠んだものだろう。なぜなら、北杜夫自身が後に屢々、この押入れの中にひそんだ幼時の思い出を書いているからである。正月早々に何かで叱られた幼児が、押入れの中に入ったまま出て来ない、そうした行為に自分の性格と似たものを感じてなげいている。「一面において父と子の深い絆^{きずな}をいやおうなく認識させるものであるし、同時に微妙な愛情の表現にもつながるもの」で、

「子に対する一種自責の念が伴っている。作者はそういう屈折した形で父親としての愛情を吐露している」（本林勝夫『斎藤茂吉』（昭38・5）わけだ。ちなみに、茂吉自身も壁に囲まれたような居室を好み、紙帳（紙で作った蚊帳）の中にももって執筆し、風を極端に嫌い、中国山水画でも「幽邃でこもる感じのする」図柄を愛した（本林、同書参照）という。まさに押入にこもる息子と似ていたのである。

④も昭和八年作で、同じく『白桃』所収。「時々感想断片集」一連中の歌である。親が子を憎むということは本来あり得ない筈であるが、そのわが子をすら、一種の電流の如く憎悪する心が一瞬ひらめき通ることがある。その親の心理を剔抉^{てきげつ}した鋭い作品で、それゆえに「あはれあはれ」という強い詠歎を伴うのである。茂吉自身「へ電のごとく」の語も長くかかって造ったが、よく考へると、仏典か中国の古い詩あたりにあるやうな気もしてゐる」（『作歌四十年』）と述べている。茂吉門下の佐藤佐太郎氏は「用例は仏典にも中国の詩にも多くあるが、

そのほとんどは人生の早く過ぎることの形容として使われている。このように瞬間の「ひらめき」の形容として、写実的に使われている例はあまりないように思われる」

(佐藤『茂吉秀歌』下巻、昭53・4)と述べている。

⑤青葉くらぎその下かげのあはれさは「女囚携帯乳児の墓」

⑥隣りにき居るをあとめごよながなが父親はそれを聞
き居る

⑦わが孫の赤羅あからひくらむ頬もひてひとり寝る夜のともしびを消す

⑤は昭和十一年作で、歌集『暁紅』所収。「東海寺坐城」一連の中の歌である。自註によると「晩春の或日、牡丹を見がてら品川の東海寺を訪うた、……賀茂真淵の墓にまうで、ついでにその他の文人墓にも敬礼をした。その時ふと、繁った若葉に隠されるやうにして、この「女囚携帯乳児墓」といふのがあるのを見つけた。ある篤志の婦でもあらうか、悪因縁によって罪になった女囚に乳児がゐて、それが育たずに死んだのをあはれに思ひ、

菩提ぼだいを吊らふために建てた、いはば共同墓石なのである。……この墓石の「女囚携帯乳児」といふ文句が簡潔で哀深あわれいのでその儘取って用ゐた」とある。「このような事実の哀れ、文字の常識をこえた簡潔さに敏感に反応するのが、この作者の傾向であり、力量であった」と佐藤佐太郎氏は言うが(佐藤、前掲書、茂吉のヒューマンな傾向を示す一首だろう。短歌史の上で、女囚携帯乳児をうたった作者が今まで居たであろうか？ なお茂吉は「ドミニカ柿本スギ之墓行年九歳」をうたったたり(『つきかじも』)、「軍用動物慰霊之碑」をうたったたり(『つきかじ』)。この種のものに関心が深かった歌人と思われ、私はこのことに或る種の感銘をおぼえるのである。

⑥は昭和十八年作で、歌集『小園』しょうえん所収。「山上漫吟」二十六首中の一首である。箱根強羅山莊じょうら滞在中の作。この「をとめご」は昭和四年生まれで当時女学校二、三年生であった次女昌子さんのようである。茂吉は昭和八年頃より同二十年まで、事実上妻てる子と別居生活のような状態が続いた(藤岡武雄『年譜・斎藤茂吉伝』新版、

昭57・3による)。そんなわけで、感じ易い時期を母と離れて生い立って来た子供たちに、ひとしお愛憐の情が深かったであろう。隣の部屋でしゃくりをしている娘、それを黙って聞いている父親である作者——一見何でもない内容をうたっているが、何ともいえない哀感が漂うのは「そういう父親の子に対するいとおしみと困惑とが、淡々としたよみ口の中にひそまっている」(本林勝夫、前掲書)からであり、また、「戦争末期に近い父子のすがたが、かなしく描かれている点にも注意してもいい」(佐藤佐太郎、前掲書)のである。

⑦は昭和二十二年作で、歌集『白き山』所収。「雀」という一連の中の一首。当時、茂吉は山形県の大石田に疎開中であった。前年の四月に初孫の茂一(茂太長男)が東京で生まれた。茂吉はそれをきき「孫茂一が生レ、ソレガ幸福デアツタ」と日記に書いて手放して喜び、「この春に生れいでたるわが孫よはしけやしはしけやし未だ見ねども」「はしけやし」は、いとしい、可愛いの意味」という歌を二十一年には作っている。孤独な疎

開地での日々の中で、未だ見ぬ愛孫を想像して、ひとり灯火を消して寝ようとする茂吉の姿が浮ぶ。「赤羅ひく」は肌や子にかかる枕詞だが、赤みを帯びてつややかに美しいという実景をも兼ねて用いられる。ここでは枕詞ではなく、嬰兒の頬の形容に用いられている」(上田三四二『現代秀歌I 斎藤茂吉』昭56・9)。「もひて」は「思ひて」である。私は本年(昭和五十七年)三月五日、小田急グランドギャラリーで「斎藤茂吉展」を見学した折、茂吉の或る葉書を見て感慨にふけた。

風にをどる鯉のほり二匹書きしハガキ孫祝ふ茂吉のこころをさなく

これはその折の拙詠である。

(14) 土屋文明

土屋文明は当年九十二才であるが、「アララギ」の総師^{すし}的立場でなお作歌を続けている。著名な現役歌人としては恐らく最年長であろう。その強靱な作歌力に驚かされ

る。彼は明治二十三年、群馬県群馬郡上郊村（現群馬町）保渡田の農家に生まれた。県立高崎中学在学中（私事にわたるが、私の同校先輩にあたる）に「アカネ」に投稿していたが、中学卒業と共に恩師村上成之の紹介で上京して伊藤左千夫の家に寄食し、その牛舎の労働に従うと共に、作歌の指導を受けた。一高を経て東大哲学科（心理学専攻）を卒業。信州へ行き教員生活を続けた後、上京。法政大、明治大等で教鞭をとった。その後、文筆人として現在に至っている。一貫して「アララギ」に属し、歌集は十一冊刊行している。万葉集や和歌史、歌人に関する研究、歌論書等の著述も多い。特に『万葉集私注』（昭24〜31）は名著であり、現在その第三回目刊行が進行中である。彼の歌風は「従来の短歌のリズムを無視するまでに詰屈（きつこつ）なりズムによって、社会化された生活者の内面を表出しようとする」（講談社版『日本近代文学大事典』昭52、米田利昭執筆）もので、いわゆる「文明調」として知られる。

①おとろへて歩まぬ吾児を抱きあげ今ひらくらむ蓮の

花見す

②幼かりし吾によく似て泣き虫の吾が児の泣くは見るにいまいまし

③人よりも忍ぶをただに頼みとすわが生ぞざびし子と歩みつつ

④清き世をこひねがひつつひたすらなる処女等の中に今日はもの言ふ

①は大正十三年作で処女歌集『ふゆくさ』所収。「子を守る」一連の中にある。前の歌に「早つづく朝の曇り病める児を伴ひていづ鶏卵もとめに」とあるから、夏の暑さの中で児は身体を悪くしていた。その子を連れて出て、抱き上げて今開こうとする蓮の花を見せたという歌で、市民生治の中のひとときの父子像が描出されていて新鮮であり、父性愛も惨み出ている。ちなみに『ふゆくさ』には巻頭に「この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝は開かず」の如く睡蓮の花をうたった佳作がある。

②は昭和五年作で、歌集『山谷集』所収。「月島」一

連の中にある。「じれじれて泣きやまぬ児をつれ出し心
おさへて大川わたる」という歌が続いている。何をぐず
っているのかピーピー泣く泣虫の子に腹を立てているも
の、それも小さい時のこの俺に似ているのだと思う
と、余計腹立たしくなるが仕方ない、という感情が、「い
まいまし」という思い切った表現で、端的に表出されて
いて、心をうつ。

③は昭和九年作で、やはり『山谷集』所収。「某日又某
日」一連の中の作。他人よりもただ、がまんすることを
頼りにして生きて来た半生を、子供と歩みながら寂しん
でいる歌である。文明には他にも「堪へしのび行く生を
子等に吾はねがふ妻の望のぞみは同じからざらむ」の如く、忍
耐克己の生活精神をうたった作が少なくない。彼の人生
観の一端でもあらうか。

④は昭和十年作、歌集『六月風』所収。「某日某学園
にて」一連の中にある。文明がどこかの学園（東京女子
大？）に講演に来た折の感懐であることが、前後の歌に
よってわかる。作者はかつて、諏訪高等女学校の教師をし

ていたことがある。その頃の生徒には、思想的に早く眼
覚めそれに身を投じようとした平林たい子や、捕えられ
て獄に死んだ伊藤千代子（東栄蔵『伊藤千代子の死』昭
54・10参照）のような直情の、すぐれた少女たちが居
た。今語っていると眼まなこをかがやかして私の講演に聞き入
っている処女らに、私はあの頃の生徒のことを胸痛いま
でに思い出す。ひたすら高い世、情潔な世の中を目指し
ていた清い処女たちよ——と文明は今、同じような処女
たちを前に涙ぐましい思いに駆られているのである。そ
して女子大教師である私自身もまた、文明のこの一連を
読む毎に、深い深い感動に心のうずくのを覚えずにはい
られない。

（お茶の水女子大学）

おめでとうございます

永井正子

休み明けの第一日目は、それぞれに趣があつて、好きです。

新しい保育室で、不安と期待が織り混じる中、初めての友だちと出会う四月。

「夏休みの楽しい思い出を、早く、友だちや先生に話そう」「幼稚園では、こんどは〇〇してあそぶんだ」などと、意気込んでやって来る九月。

昨日と今日と、特別何という違いがある訳ではないのに、自分も周囲も、家中が、町中が華やいで、うきうきうれしい気分になる——そのうきうき気分をすっかり持ち込んで始まる、一月の幼稚園。

あけまして おめでとうございます

「ごあいさつなさい」と促されても、はずかしそうに母親の後ろにしがみついてしまった、三歳児のAちゃん。

B君は、保育室に入るなり、べたんと正座して、「あけましておめでとうございます。ことしも どうぞよろしく おねがいます。」

C君は、「おめでとう」とひと言。

お正月の挨拶をするのが照れ臭くて、ふざけてばかりいるD君。

おしゃまなEちゃんは、お母様とそっくり同じ言葉と仕草で、新年の挨拶を済ませた。

F君。保育室に入って来るなり、「めでためであの……」とうたいだした。それも、くにやくにやと踊りながら。

四歳児のお正月。

「おめでとうございます」と言えただけれど、やっばり花笠音頭をうたっているF君。

B君は、今度は座らないで、丁寧におじぎをした。

C君、「おめでとうございます」少し言葉が増えた。お正月が来て、みんな、ちょっと大人になりました。

新しい服・新しい靴・新しいハンカチに新しいタオル……子どもの気持ちも新しくなって、急にひとまわり大きくなった感じがする四月。

夏休みの間に、家で・公園で・また海や山で、たくさんの人たちとの交わりを通して育まれたもの全てを携えて、彼らは幼稚園にやって来ます。二学期始めの日の挨拶は、お休み中の行動の総決算。

お正月の、あの何とも言えない恥じらいの中で子どもたちが見せる成長は、新年を迎えて、年齢がひとつ増えるからでしょうか。

学年が進む時や、誕生日をお祝いしてもらった時の「ひとつ大きくなった」感じとは、ちょっぴり味が違う、お正月を迎えて「大きくなった」子どもたちの感触。

「お父さんもお母さんも、幼稚園もお友だちも、わ

たしと一緒に大きくなった」と気付き、それだからこそ、相手に最もふさわしい挨拶を送ろうとする。成長を共に喜ぼうと張り切って登園して来たのに、保育室で待っていた先生は、ちっともわかってくれない。困ったな——子どもたちは、あるいは、こんなふうに考え、そのため、いつもとは違う様子で、「おめでとう」の挨拶をするのでしょうか。

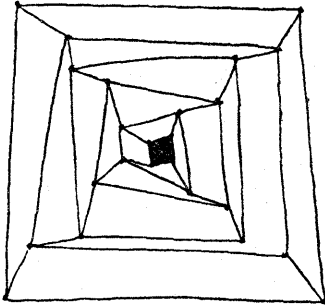
卒園までの保育に残された時間は、正月二か月程。最初に描いていた事柄の多くが未完成であることへの焦りを、子どもたちには見つかからないところに仕舞込んで、残りの日々を子どもたちと楽しく過ごすためのスタートを気持ち良く切りたいものと、少々構えて待つ新学期。

おめでとうございます

この瞬間に、もうすぐ小学生になる彼らが見せてくれるであろう様々な姿を想像し、それにふさわしく私も成長したいと願うこの頃です。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

エリクソンと幼児教育 (13)



仁科 弥生

同一性形成と青年期

前回では、同一性形成の過程において、幼児期と社会が果たす役割について考察した。今回、青年期を問題にすることは、「エリクソンと幼児教育」というテーマからいえば範囲を外れることになる。しかし、先にエリクソン理論の中心的概念である同一性を定義するにあたって触れたように、すべての同一性の各構成要素が、青年期において最終的なまとまりを獲得すると仮定されていることを思えば、青年期を抜きにして同一性の形成を語れないことは明らかであろう。それどころか、同一性の形成過程は、幼児童期における断片的な経験が、青年期において自我によって選択的に再生、要約され、新しいまとまりをもつ経験へと再統合される過程であると要約できる同一性の概念にとって、青年期はとりわけ重要な意味をもつといっても過言ではないのである。

事実、エリクソンは、同一性の確立を青年期の発達課題であると考えている（『幼児期と社会』）。彼によれば、

青年は、幼児童期における同一化のすべてを、そして同一性の全構成要素を、イデオロギー的前提、歴史的要素、社会的役割に一致するように再統合し、新しい同一化に配列しなおさなければならないという。いいかえれば、人は、青年期において、自己の本質的な特性について、周囲の期待や要請との関係において問いなおし、これからどういふ役割と目標にむかって歩いて行こうとするのかをみきわめなくてはならないのである。

一方、同一性の確立に失敗すると、青年は同一性の拡散や社会的役割の混乱に陥ると考えられている。そして、同一性の感覚の全面的な喪失は、「自分が誰であるかわからない」という感情として表現されるという。その場合、自分自身の中の持続的な斉一性と連続性の感覚は失われ、社会的役割をになう自信もなくなってしまうという（『幼児期と社会』）。したがって、同一性の確立には、過去において準備された自己の内的な斉一性や連続性と、これからかわると予測される外的な、つまり社会的な自分の存在の意味、たとえば「職業」という実体

的な契約の形で明示されるような自分の存在の意味とを一致させることができるかどうか重要な鍵となるのである。

ところで、ニューマンらは、エリクソンの理論が対象とする青年期は厳密に言えば青年期後期に対応するものであると指摘する。たとえば、同一性の確立という課題は、大学生段階の青年の関心を正確に反映するだろうが、それをそのままと若い青年にあてはめて考えることは不適當であろうと述べている（『生涯発達心理学』）。そして彼らは、エリクソンのいう同一性の確立を個人的同一性の発達としてとらえ、その先駆をなすものとしての仲間集団の同一性の発達を青年期前期の課題としてあげている。これも一つの見識であろうと思われる。

では、エリクソンは、青年期のどのような側面をとくに注目しているのであろうか。以下、そのような観点から述べてみよう。

人は、成人期に、生涯にわたって自分の社会的状況を

決めることになる職業や結婚相手、価値観、政治思想などを選ぶことになる。このような重大なことがらを選び、或は決定する前に、そのために必要な準備過程に入る。それが青年期である。そこで、青年は自分の能力や興味と、理想とする社会的役割とをどのように結びつけることができるか、はじめて現実的に模索しはじめる。

たとえば、自分の素質に適した職業的モデルを見いだそうと努力する。しかし、自分の生涯をかける職業の獲得、つまり一つの職業的同一性に定着することは容易にできることではない。その間、まさに自己発見の可能性と自己喪失のおそれとが背中あわせになって青年を不安に陥れる。このような状態を、エリクソンは同一性の危機と呼んでいる。この場合、「危機」は、いわば病の峠のようなもので、良い方向へ進むか、悪い方向へ進むかの分岐点、誰もが避けては通れない転回点という意味で用いられている。そこで、「良い」方向へ進めば、青年は、自分が本当になりたいと思っっている希望と周囲の期待とを一致させることができ、のびやかに、たくまし

く、率直に、そして実際的に自己実現を果たしていく。一方、「悪い」方向に解決されると、同一性の混乱が長引いて、青年ははつきりとした病的な症状や退行などの同一性拡散症状を示すようになるという（『自我同一性』）。

そして、そのように危機が悪化する原因として、幼児期における自律性や自己統制能力、また自発性などの発達何らかの理由で十分でなかったという個人の側の要因や、青年期に出会う価値があまりに矛盾していたり、不適當であったという社会の側の要因があげられている。しかし、同一性の確立にとっては何といっても、個人内部の激しい発達の变化や、外的諸条件の変化に直面しながら、斉一性と連続性をもちつづける自我の強さとしなやかさがもつとも核心的問題であることはいうまでもないであろう。また、悪化した同一性の危機は、自我の統合の一過程であって、最終的には良い方向へ進むかもの想定されている。つまり、エリクソンは、同一性の危機を、青年時代から成人期前期にかけて起こる、人

が大人の役割を身につけるために経なければならぬ正常な発達の過程と考えているのである（『自我同一性』）。一九五八年に出版された『青年ルター』は、俊才の青年ルターがいかに同一性の危機を克服したかを実証した彼の労作である。

以上のように、青年期に至って、人ははじめて同一性の危機に直面する。しかしながら、同時に、それを克服するための知的、精神的、社会的条件もとのうのである。知的側面についていえば、たとえばピアジェによれば、この時期の知的発達の特徴は「形式的操作」ができるようになる段階である。青年はもはや具体的内容に束縛されずに、仮説をたて、仮説にもとづいて考えを操作できるのである。この思考能力の高まりとともに、青年は、幼児童期における同一化や同一性のすべてを疑問視するようになる。そして同年齢の仲間や家族以外の指導的な人物に新しい同一化の対象を求め、自らの新しい同一性を定義しようとする。また家庭や学校という身近な環境の外に新しい可能性をさぐり、さまざまな価値や思

想を検討することに熱心になる。このようなことは自己の同一性の確立には不可欠の条件であろう。

また、青年時代はもっとも純粹に価値を追い求め、これに従って生きようとする時代であるとよくいわれる。エリクソンは、この時期に生まれる自我の特性を誠心と呼んでいる。青年には、忠誠を求める殆ど本能と呼んでもよいほどのものがあり、青年は忠実になれるイデオロギイの展望や人物を探し求めるといふ。（エリクソンの場合、イデオロギイとは、政治的現象そのものではなく、社会が、明確、不明確な形で青年に提示する理想像の体系や思想的枠組を意味するようである。そして、忠誠とは、価値体系の矛盾にもかかわらず、青年が自ら選んだものに忠節をつくす能力であると定義されている。『洞察と責任』）。そして青年は自分の能力をためずさまざまな経験に参加し、自分自身をはじめ、自分にとって意味のある人々や集団、またその規律などに忠実に服することによって成熟していく。また、自ら選び、真理であると信ずるものを擁護するために全エネルギーを捧げ

る。その結果、献身、自己犠牲という強さが生まれると
いう。その場合、堅固なイデオロギーや支えてくれる大
人や信頼できる仲間の存在がその源泉として重要である
ことが強調されている。したがって、同一性は忠誠心の
発達を一つの前提として青年期に確立されると考えるエ
リクソンの概念には、先にふれたニューマンらのあげた
仲間集団の同一性の発達という課題も包含されていると
いうことが明らかとなる。さらに、エリクソンは、忠誠
をつくす価値ある対象を青年に用意するのは大人の側の
重要な役割であることも示唆している。

さて、エリクソンが『幼児期と社会』の中で、青年
を、子どもとして学んだ道徳と、大人として発展すべき
倫理の中間に位置する心理社会的段階にあるととらえ、
その心理は「猶子期間」^{モラトリアム}の心理であると述べたことはよ
く知られている。彼は、青年期には、時間の圧力が一時
的に取り除かれ、若者たちに自由に活動のできる余地が
与えられている事実注目したのである。モラトリアム
とは、元来、法令で一定期間、債務者の支払いを延期さ

せることを意味する用語であり、それをエリクソンが心
理学に転用したのである。彼によれば、モラトリアムと
は、同一性にとって重要な意味をもつ、大人としての社
会とのかかわりが一時的に延期され、社会からの期待も
ゆるみ、青年には正の同一化の可能性が大になる期間で
あるが、同時に、青年が内省し、役割実験を試みる期間
でもあると定義されている。すなわち、青年の多くは、
既存の、或は将来の秩序の一断片に自分をかかわらせ
たり、或は限定してしまう前に、真理の奥底をきわめて
たいと欲する。また、変化の中に何か永続的なものを求
めようとする。或は社会から提供された同一性を自分が
本当に欲しているかどうか確信がもてるまで吟味しよ
うとする。社会のどこかに自分に適した活動分野を見いだ
そうとして、さまざまな試行錯誤を繰返すのである。そ
の結果、時には非行的、逸脱的、自己破壊的行動に走る
ことさえもある。そうして、社会の側も、そのような行
動の自由を青年に認め、挑発的、遊戯的行動も選択的に
許しているというのである。もっとも、それらは社会の

価値体系から大きく逸脱しない程度のものである場合が多いが。たとえば、古くは徒弟奉公期間が、そして現代では大学生活が一種のモラトリアムとして制度化されている。しかし当然のことながら、真のモラトリアムには期限があるのである。それが終わると、精神的で、目標志向的行動の段階が始まると想定されている。すなわち、青年は自分の能力を葛藤に縛られずに自由に駆使できるようになり、それを職業に生かしていく。同一性の形成過程が最終的に到達すべき目標は、職業や友人関係や伝統などから無限の資源を得て、やがて究極的関心（宗教）をもつに至ることであると、エリクソンは考えている。したがって、青年期が同一性の危機の段階であるからといって、同一性形成そのものは青年期にはじまるものでも、終るものでもなく、それは生涯つづく発達過程として概念化されていることも見落してはならない点であると思う。

ところで、エリクソンは一九五〇年から一九六〇年まで、マサチューセッツ州のストックブリッジにあるオー

ステイン・リッグス・センターで研究を続けている。実は、一九四九年に、カリフォルニア大学の理事会が、教官に課す一般誓約書に加えて、さらに忠誠の誓約書の提出を要求するという出来事があった。それは「勢力や暴力による合衆国政府の転覆を正しいものと信じて煽動し、或は教えるどんな党派もしくは組織も、私は信じません。その一員でもありませんし、また支持もしません。」という誓約であった。そして翌年には、その忠誠の誓約書を毎年署名して確認すると契約条項が変えられた。エリクソンは、学究生活の中への煽動者の侵入という危険に対処するためのこのような空虚な宣伝行為に負担することはできないとして、契約書に署名することを拒否して、カリフォルニアを去ったのであった。

そして、このオーステイン・リッグス・センターで、彼が「同一性の拡散」という臨床像としてとらえた患者たちとの出会いがあったのである。すなわち、そこでは、情緒不安定で、その動搖の統制ができず、また不安で無力化され、何になりたいのか、どこへ行きたいのか

も決めることができなくなり大学を去った若い男女が精神医学的「助け」を受けていた。エリクソンの解釈によれば（「自我同一性の問題」）彼らは、急激な技術革新や文化的、政治的変動の歴史の中で、これまた激しく対立し、或は変化する同一性の諸要素を自己の同一性として調和させることができずにいる若者たちであった。彼らは、急性の同一性の拡散状態を示し、深い空虚感や孤立感や不安感の中で親密な関係を結ぶことや、職業の決定などができなくなっていた。或は、形成途中の同一性を、イデオロギーのない指導や徴罰から防衛したいという欲求から、大学を離れていたいと思ひ、或は自分なりのやり方で自分に適する道を探そうとしていた。つまり、若者たちは、自己の同一性を確立する戦いの中で、進むべき道に行きくれて、しばらく自分で考え、自分なりに決定するための「時間」を欲していたのである。したがってエリクソンの仕事はまさに彼らに有意義なモラトリアムを与えることであつた。

このような患者が自己の同一性を確立するための治療

的要求として求めてきたものは、いつの時代でも、またいづこの若者も求める自己の理念の確立の要求と同一のものであらうという深い洞察がエリクソンに生まれた。さらにこの要求は歴史の中でも危機的な時代にはとくに顕著に示されるであらうという仮説から、彼はマルティン・ルターの生涯と信仰に深い興味をもつた。そしてルター自身の言葉やルターについて書かれた多くのものの中に、センターの若い患者の中に繰返してみてきた心の闘いと同じものを読みとつたのである。臨床家エリクソンの目に、修道院に行くことを決めた青年ルターと、オーステイン・リッグス・センターに助けを求めてやって来た若者の姿とが重なって見えたにちがいない。若者たちは、ルターが二三歳から三三歳になるまで、修道院でじつと待つたように、センターで時を過ごす必要があつたのである。

ルターは、修道士であり、異端者であり、究極的には偉大な宗教的政治家であつた。彼の父、ハンス・ルターはマンズフェルトの鋳夫であつた。貧農の出身であつた

彼は、子どもたちに大きな期待を抱き、教育を受けさせた。マルティンには、法律家となってこの世での成功者になることを望んだ。二二歳のとき、ルターは父の命令でエルフルト大学で法律の勉強を始めたが、急な「回心」を経験して、父親の願望を拒否し、修道院に入ったのである。ルターのその青年時代について、エリクソンは次のように解釈している。すなわち、修道院での深く没頭した禁欲生活の中に、ルターはあまりにも理不尽な要求をしてくる父親からの避難場所を見いだしたにちがいない。戒律厳守派のアウグスチン派の自分の上司に時間とエネルギーを完全に捧げることによって、彼の直面する誘惑や悩みは棚上げされた。また、自分の父に対して巧妙な形で反抗した息子は、修道院で、ことさら懸命に新しい宗教的上司に服従しようと努力したのであった。こうして、彼は長い沈黙と、意義深い儀式の生活の中で、苦しみ、考え、成長し、成人となり偉大な指導者となるための「時間」を過ごした。そして二〇代の後半に、新しい原理にたどりつくと、彼は一変して、福音を

伝える人となった。そして学生や修道士に対して説教や講義を精力的に行なうようになった。ついに彼は自分の才能と苦悩の両方を活かす道を見つけたのである。つまりようやく自分がなしうることを、自分が行おうとしていくことを明確に知った彼は、モラトリアムと決別して、活動的で生産的な成人の生活に入ってしまったのである。

現代の多くの青年たちも、青年ルターが直面したような「同一性の危機」を何らかの形で経験する。勿論、自分の将来や職業についての決意をルターのように劇的に固める者は決して多くはないであろう。しかし進むべき道をさがしあぐねて、まわり道をする若者は多い。このような青年たちを、怠け者、非行少年、神経症者など安易に診断したり、レットルをはったりすることをわれわれは慎まねばならないと、エリクソンは説いている。また、青年の逸脱した行動や、親の意に反する行動も実はモラトリアムを作り出そうとする彼らの試みであったりすることを親や周囲の人々は理解しなければならぬこと、そして青年が最終的に大人社会への職業的コミット

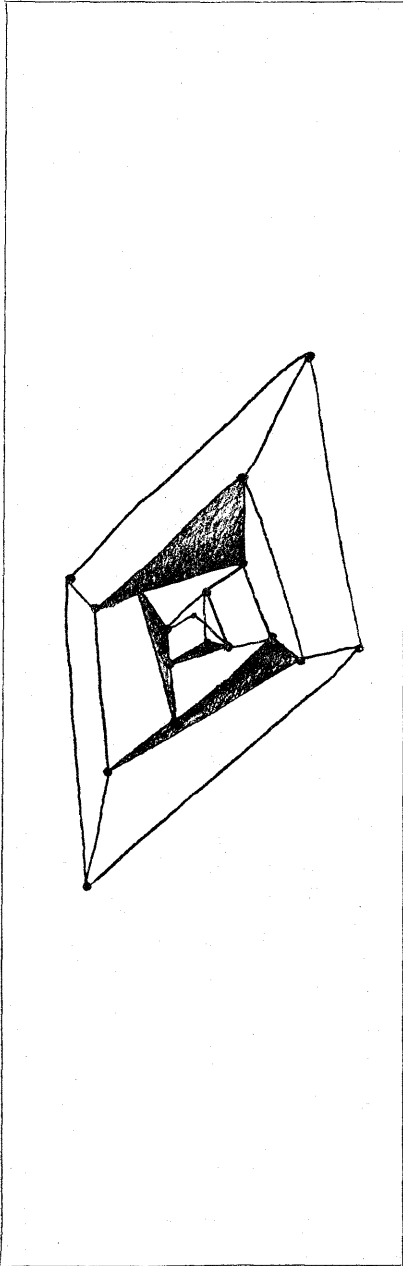
メントへと進むことができるようになるまで、親は彼らを支え、見守ることが必要であることの意味をわれわれに明示してくれるのである。

次回で、「精神分析のおよび歴史的研究」という副題をもつ『青年ルター』を中心にして、エリクソンが同一性の概念を駆使して行なったマルティン・ルターの分析をも少しくわしく紹介してみたい。

(津田塾大学)

〈筆者紹介〉

一九三〇年大分県生れ。一九五三年津田塾大学英文科卒業。
米国カールトン大学心理学科卒業後、アイオワ大学大学院修士課程修了。アイオワ児童研究所員をへて、現在、津田塾大学助教授。





ブリューゲルの「子供の遊戯」 9

——「私の青い塔の中に誰がいるの」から「泳いだ後で」まで——

森 洋子

56 私の青い塔の中に誰がいるの

Wie zit er in mijn blauwen Toren (図一)

ひとりの女の子を囲んで、地面の上に数人の子供たちがあたたかも彼女を守るように坐っている。一番手前の女の子の赤い服と白いエプロンは、頭上の青い布（エプロンか）と美しい色彩的なコントラストをなしている。この青い布は、立っている女の子がその端を、他の仲間が他の端を持っているが、実は塔を意味しているのである。

る。ド・マイヤーの研究^{注1}によると、この遊戯は、「誰がこの青い塔の中にいるの」「王様の王女さまだ」という会話で始まるという。すると鬼が周囲を歩きながら中の女の子を順番に連れ出し、最後に王女がひとり残される。女の子たちは彼女をめぐって踊りをし、王女の後継者を探し出す。

ハルトマンとレンズは子供たちの会話を次のように推定している。^{注2}

A 誰がこの高い塔の中にいるの。



図1 ブリュエール「私の青い塔の中に誰がいるの」(「子供の遊戯」の部分⑤)

B 王様の王女さまだよ。

A この子供たちは誰のもの。

B 私のもの。

A 私がそのひとりもらってもいい。

B だめよ。

A じゃあ、私が塔の周りを三回廻って、

侍女の頭を切り取るう。そしたら娘ひとりが

私と一緒にいくべきよ。

ピフ、ペフ、パフ、

頭を切ってしまえ。

それから青い布をもっていた子供Cがそれを引っぱり、輪の真中の子供を押し倒す。すると他の子供たちはワァーといって夢中で逃げ出す。Cが彼らを追いかけ、一番最初に掴まった子供が今度は高い塔の中に坐らせられる、というのがこのゲームのルールである。

ヒルズはこのグループの中で、右側に坐っている二人の男の子は *Maidelschnecker* といって女の子の遊びを邪魔する人間(直訳は女の子を味見する人)の役をしていると述べている。^{注3} さらにヒルズは古くからあるドイツの遊び「お母さん、お母さん、貴方の子供はどこに行っただか」を適用させる。他方、グリムがその兄弟宛に書いた手紙を引用しながら、こう解釈する。つまり女の子たちはある母親から子羊(一番年下の子供)を買い、青い布にくるんで持ち運ぼうとする時の会話である。母親は答えて曰く。「私は貴女に昨日、ひとりの子をあげま

した。一昨日もあげました。毎日あげられません。」こういったながらも、ついに最後の子供も二人の女の子に売られる。そこで女の子たちは「ああ、お母さん、お母さん。子供はどこにいったの、蛇やひき蛙があの子を食べってしまった」とはやし立てる。するとその母は立ち上がり、子供を探す。探し終ったら、遊戯は終りとなる。

57 ガラガラ遊び Het Klepbord (図2)

赤い柵の横を、小さな女の子がガラガラを鳴らしながら歩いていく。この玩具は長方形の板の真中の穴に棒を入れ、その棒先にハンマーを紐で固着して作る。板の下の把手を持って前後に振ると、上のハンマーは上下に動



図2 ブリュージェル
「ガラガラ遊び」
('子供の遊戯'の部
分⑤)

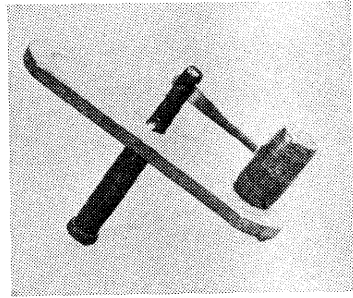


図3 「ガラガラ」木製31.5×8.5cm 19世紀

彩飾にこの玩具で遊ぶ子供がみられる(図4)。

ブリュージェルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」では、四旬節側の擬人像の前後に、六人の子供がこの遊びに興じている(図5)。この子供たちがなぜ大騒ぎをする謝肉祭側ではなく、禁欲の四旬節側にみられるのかは、つぎに説明するこの玩具の実用性からうなずけよう。教会では復活祭前の聖木曜日(ミサ)で、司祭が「天のいと高き所には神の栄光あり」と唱えると、鈴が賑やかに鳴らされる。しかしそれ以後、三日後の復活祭の朝まで、ミサでの鐘や鈴の使用は禁じられる。そのため、ヨーロッパの

き、板の左右両側にカタカタという音をたてる。紐の代わりには後代では蝶番を使うこともあった(図3)。なお十六世紀前期のフランドルの時



図4 シモン・ベニング(?)「ガラガラ遊び」(『時禱書』) 3月の部分 16世紀前半
ミュンヘン バイエルン州立図書館

しながら知らせたのであった。また夜番が町や村が安全かどうか見廻りをしながら、このガラガラを鳴らしたと
いわれる(図6)。夜番を画いた版画に、こう書かれて

子供たちは三日間、教会の鐘や鈴がローマの教皇のもとに旅をしている、そして復活祭の朝、羽根の生えた鐘や鈴たちがチヨコレートや砂糖でできた卵や兎を運びながら、帰ってくるという伝説を信じていた。こうして鐘や鈴の沈黙する三日間、ミサでは代わりにこのガラガラが使われたのである。とくにミサを始めるとき、ミサ答え(侍者)は村道をガラガラを鳴ら



図5 ブリュエール「ガラガラを鳴らす子供たち」(『謝肉祭と四旬節の喧嘩』の部分) 油彩 1559年

いる。
「愛するガラガラ鳴らしさんよ、しっかり見廻ってくれ、私は眠りに行く。おやすみなさい、神様、彼に祝福たまわんことを、夜番に風や雨のないように。」
さらに十九世紀の版画(図7)に、子供がガラガラをもつて町を歩く情景があり、そこにもこう歌われている。



図7「ガラガラで遊ぶ子供」(「子供の版画」の部分)版画、ヘメレルス・ヴァン・ハウテル発行、スハールベーク (1827~1894) ベルギー



図6「ガラガラ鳴らし」(「子供の版画」の部分)版画、ブレボルスとディルクス・ゾーン発行、トルンハウト (1820~1845) ベルギー

二人の子供が互いに向きあって、風車を脇の下にかかえ、槍合戦ごっこを開始しようとしている。子供たちは裾までの洋服を着ているが、多分男の子であろう。向かって右側の子供はすでに歩を進め、攻撃的である。それに対し、相手の子供はまだ立ち止まったままで、防禦的である。この風車は当時すでに二枚と四枚羽根があったらしく、ブリュッゲルよりも一世紀前の、ヒエロニムス・ボスの祭壇画には二枚羽根のものが見出される。それは十五世紀末に制作された「十字架を担うキリスト」の

「ドリスよ、君はガラガラと遊んでいる。一体何時に
なったのか。(ドリス) まだ十時になっていないよ。
わたしは遊び廻るの。わたしにとって時間があまり
長すぎないように。」
なお今日でも、リンブルグ州のトルンではこのガラガラ
が聖木曜から復活祭までの三日間、ミサ開始の告示に
使われるという。

58 風車かたむねまの槍合戦 *Tournooren met moelentje*

(図8)

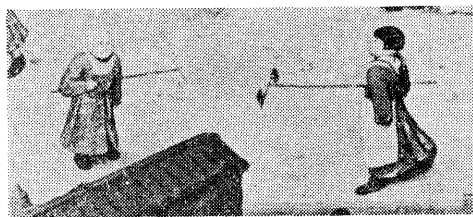


図8 ブリュエール「風車で槍合戦」(「子供の遊戯」の部分⑧)

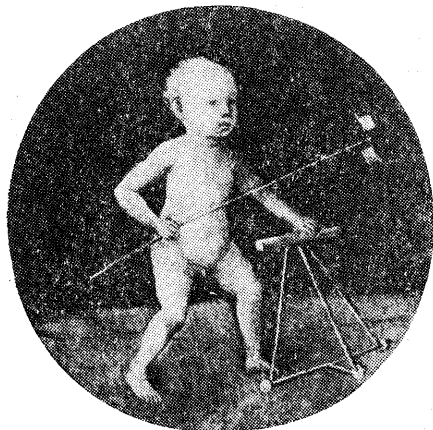


図9 ヒエロニムス・ボス「風車と歩行器をもつ幼児キリスト」(「十字架を担うキリスト」の裏面) 油彩 15世紀末

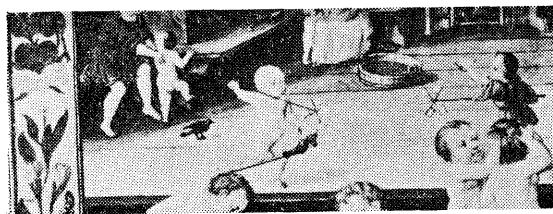


図10 「風車で遊ぶ子供」(『太陽の光輝』のドイツの彩飾写本の部分) 1582年

裏面に、左手で歩行器を、右手で風車をもつ幼児イエスの姿(図9)である。また十六世紀後半のドイツの写本では、二枚と四枚羽根の両種類の風車がみられる。(図10)。風車を回すときは、棒を水平にして風にむかって走らねばならない。なお十六世紀の版画(図11)やタイル画(図12)でも、二、四、七枚など種々の数の羽根の風車があり、ジャック・ステラの本の挿図では、二枚と四枚の風車が同時にみられる(図13)。

ここでは槍合戦というよりは、玩具としての風車に注目してみよう。というのは子供たちの持ち方からして、羽根を回すことにも関心を抱いているからである。十七世紀のヤコブス・カッツ(一五七七—一六六〇年)は「風車」について、こう寓意的な詩を書いている。「あそこに風車をもっている子供がいる。



図12 「風車ごっこ」オランダのタイル画
17世紀後半（図11にもとづく）

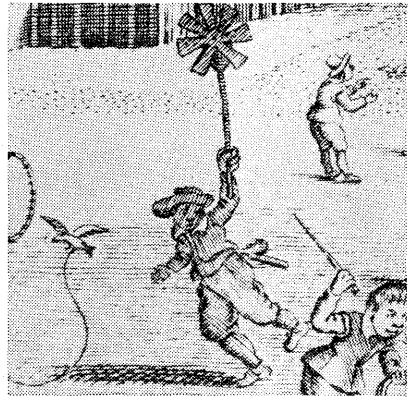


図11 E. シリマン「風車ごっこ」（カッツ
『結婚について』1642年より）銅版画

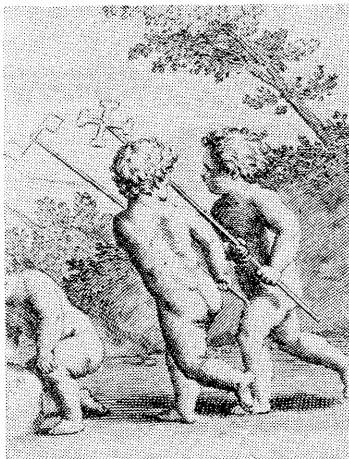


図13 クローディン・ブゾネ・ステラ「風
車ごっこ」（ジャック・ステラ『子供の遊戯
と楽しみ』1657年よりの「ピンごっこ」の
部分）銅版画

い、つねに動揺して
いる愚かな人間の比
喩に使われている。
十七世紀の画家で詩
人であったアドリア
ン・ド・ヴェンネも
カッツと同じく、こ
う歌っている。

みてごらん、どんな風に道の上を跳んでるか。
ある時は冷たい風、ある時は微風に出会ったり、
ある時は強い風が吹いたり、
風車はそのためぐるぐる回る。
多くのひとはその中に風車をもっている。
だが誰もがそれに気がつかない、
それはくるくる回るようにできている、
ひとはくるくる回ることができずまで、
求めている。^{注4}

なおカッツのフランス語版の詩での風車は静寂さを失

「われわれのひとりがかう云う。

彼は『風車に当たったのだ』と。だがやめてくれ。すべての人間が迷っているのだから。何処で誰を引張ってきても、私はうけ合うよ。その人は馬鹿気たことをするか、ぶつぶつ文句を云うか、だらだらと嘆いているか、のどちらかである。」

ここで「風車に当る」een slaghe van de Molen というのは、頭が風車の長い羽根に当たったため、馬鹿になる、という成句なのである。

なお、ストウートの『ネーデルランドの諺、云い廻し、成句』の中でも、「風車をもって走る」Hij loopt met molentjes につきのような説明を与えている。^{注5}すなわち「彼は頭が変だ」「彼は風車に当たってしまった」という意味で、十六世紀末の例としてはオランダの劇作家ブレデロの用語に、「君の頭は風車のように動く、頭の病氣なのか」（一五九〇年）がある。^{注6}また『やもめと偽わる男と祭りで欺まされた女の子』^{注7}には、「ワインは私が考えていたよりも強く、私の頭を全く狂わせ、風車をもって

走らせる」という用例が見出される。「十九世紀に編纂されたハレボメの『ネーデルラントの諺事典』^{注8}には「彼は頭に風車をもっている」Hij heeft een molentje in het hoofd は「彼は阿呆だ」Hij is gek の意味として説明されている。また一六四四年にオランダ語に翻訳されたチェーザレ・リーパの『イコノロジア』（伊語初版一五九三年）でも、「愚かさ、狂気」についてこう叙述されている。^{注9}「だらしなく衣服をつけている婦人で、誰かが持っている風車をみて笑っている。子供たちはその人と走り回り、風車は風でくるくる回る。」さらにリーパは「愚かさ、狂気」の男性の擬人像について、長い黒い衣服を着た老人は、笑いながら、籐製ステッキを棒馬とし、右手に風車をもっている。子供たちはその風車で遊ぶのを楽しみとしている。老人は一生懸命風車を風の中でくるくる回す。」

以上、少し詳しく述べたが、「風車を回す」というのはたんなる遊戯だけではなく、ヨーロッパでは阿呆や愚者の寓意としてみなされていたのだった。

59 穴掘り Put graven (図14)

小さな砂山で三人の子供が遊んでいる(59、60、61)。59の穴掘りは独り遊びで、この子供はおそらくトンネルを作っているのだろうか。

60 砂山から駆け登る Op den Zandberg loopen (図14)

61 砂山へ駆け降りる Den Zandberg afluopen (図14)



図14 ブリュエゲル「穴掘り」「砂山から駆け登る」「砂山から駆け降りる」「子供の遊戯」の部分⑤⑥⑦

ド・マイヤーの分類では60と61に分けられているが、

おそらく二人で同じ遊戯をしているのだろう。グリュッ

クは「城遊び、この山は僕のもの」Burgspiel, de berg

is mijn、ヒルズは「ねえ、僕は君の丸太小屋の上だ。

山は僕のもの」Man, man, ik ben op je blokhuis; de

berg is mijn と呼称している。筆者にも60と61は組に

なった遊戯のように思われる。つまりわが国でも「お山

の大将われひとり、後からくる者つき落せ」というかけ

声があるが、ここでも砂上に立った者が王様で、彼は

「この山は余のもの」と宣言する。すると他の子供が王

様を追い出そうとして駆け登る。ドローストは十七世紀

のこの遊びの歌を見出した。

「わたしの高い山、

どの位、わたしは山の上にいるだろうか。

七年と一日だ。

わたしは上にいる、お前は下に行け。」

ハイデン(一六三三年)はこの遊びについてこう説明している。「少年は叫ぶ。『僕はブルックハルトだ。』僕は

ここに立っていて、敵を待っている。他の者たちはひとりが上に登って来るまで、見張って歩き廻る。世界もこれと同じこと。ひとりが成功すれば、他は失敗する。誰でも堆肥を守るのだ。強い者が来れば、他の者は行かねばならない。」

62 スカートを膨らませる

Boefien maken - Aaien en blaaien (図15)

三人の女の子がスカート遊びをしている。二人はすでにぐるぐる廻り(aaien || draaien)、立ったり、しゃがんだり(Dlaaien)して、スカートを大きく膨らませ、草の上に坐っている。第三の少女はまだぐるぐる廻りながら、スカートを翻している。ブリューゲルはとくにこの第三番目の女の子の動きに気を配っているようだ。この遊戯のオランダ語の呼称、“Aaien en blaaien”は民族学者のコックとテーリンクによるものだが、^{注14}“aaien”という言葉自体は「やさしくなでる」という意味で、この遊びにふさわしい意味とは思えないので、おそらく

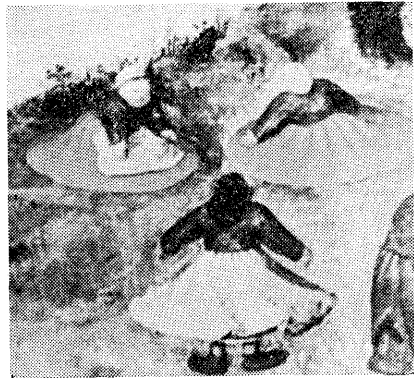


図15 ブリューゲルス「カートを膨らませる」
「子供の遊戯」の部分©

“draaien” (廻る)の幼児語が“aaien”となったのであろう。このほかこの遊戯は英語で“Turn, Cheeses, Turn” 仏語で“La cage à poulets” (鶏の

鶏籠)と呼ばれるが、前者は円盤形のチーズ、後者は鶏を市場へ運ぶ昔の籠の形から連想されたのであろう。とくに十八世紀初期からフランスで流行した特別に広がったベチコートは panier (籠) とよばれたが、また庶民たちがこれを「鶏の籠」と呼んで揶揄したのである。

63 木登り Boomklimmen (図16)

丸帽をかぶったひとりの少年が一生懸命に木登りをし

ている。木登りは少年たちにとって春の楽しみのひとつだったが、それは鳥の巢の卵を奪うためだった。少年たちは色々な種類の鳥の卵を集め、卵黄を吸い出して、自分の持っていない卵の殻と交換し合うのであった。ヒルズは、ドイツでは昔から大市するとき、石鹼をつけて登りにくくした細い高

い棒で、木登り競争をした、と述べ、このブリュッゲルの子供も当時行なわれた競争の模倣をしているのではないかと推測している。^{注15}しかし木登りというのは、巢や卵を盗むという目的がなくても、ただ高いところに登って上から景色を眺める、ということ自体に楽しみがあるのではなからうか。またブリュッゲルの画いた樹には巢らしいものも見い出されない。

- 64 浮袋をもつて泳ぐ Zwemmen met de Blaas
 65 足を水に浸す Voetjes baden
 66 川辺で泳ぐ Zwemmen van den kant



図16 ブリュッゲル「木登り」
 (「子供の遊戯」の部分)

67 泳いだ後 Na het Bad (64～67 図17)

画面の左上方に川があり、64の泳いでいる子供、65の岸辺に腰を下ろし、足だけ水に浸している子供、66のすでに肩まで水につかり、泳ごうとしている子供、67の泳いだ後で草原の上に着り、服を着ている子供(グリュックは逆に泳ぎに行くため、服を脱いでいる、と推定)^{注16}などがみられる。いずれも今日のような水着を着ていないのは、十九世紀まで一般に水泳は裸のままだったからである。十七世紀の「子供のためのカレンダー」(図18)やタイトル画(図19)でも、子供たちはみな裸で泳いでいることが分かる。水泳はどの時代でももっともポピュラ

「なスポーツであったことは疑いのないことだが、ローレンハーゲン（一五九五年）はこう謳っている。

「若者たちは夏になると、

水や草原で喜びを求め、

学校で生徒たちがあひるのように、

泳いだり、水を浴びたり、

鶯鳥や白鳥のように上手に泳ぐように。」^{注17}

水泳が健康によい運動であるという認識は、過去、現在も同じだが、一八〇三年の版画カレンダーでは「川で



図17 ブリュエーゲル「水泳遊び」
（『子供の遊戯』の部分㉔㉕㉖㉗）

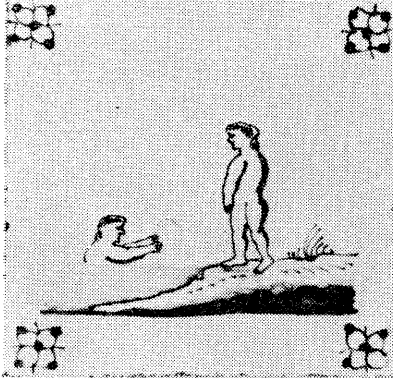


図19 「水泳ごっこ」オランダのタイル画
1885年頃



図18 「水泳遊び」（『子供のための
・版画カレンダー』）1803年以前

泳ぐこと、それは人間の健康にとって良いことだ」と記されていた。

ところで64の男の子は背中に浮袋を背負っていたが、これは牛か豚の膀胱を使用してゐる。既述の26の子供（本誌一九八二年三月号参照）も豚の膀胱を風船として遊んでいた。ところが浮袋に頼って泳ぐ子供を寓意してフィッシュヤーはその『寓

「意人形」(一六一四年)の中で、「頼るのは悪いことだ」というモットーを与えている。挿図(図20)は浮袋が手



図21 「何かを知っている者はそれを役立てる」(フィッシャーの『寓意人形』1614年より) 銅版画

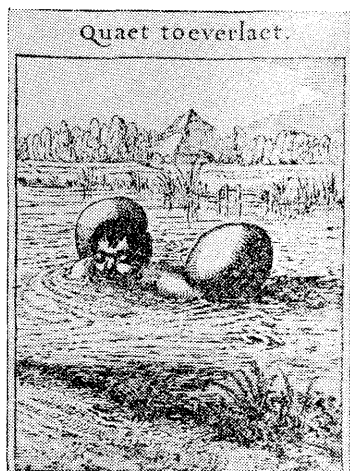


図20 「頼るのは悪いことだ」(フィッシャーの『寓意人形』1614年より) 銅版画

から離れそうになり、もがき苦しむ子供を表わしているが、そこにはこう歌われている。

「他からやって来るべき助力や援助に頼る人間は、弱い土台に家を建てると同じ。彼は丈夫な綱や大綱をもっているながら、家の屋根裏に置いて来た船長も同様で、必ず危険な目に遭う¹⁸だろう。」

フィッシャーのいう「弱い土台に家を建てる」はマタイ伝七章二十四節以下の「砂の上に家を建てた」愚かな行為に典拠している。しかし他方では、フィッシャーは自力で泳ぐ行為を賞讃し、「何かを知っている者は、それを役立てる」というモットーのもとで、川をすいすいと力強く泳ぐ少年の姿(図21)を与えている。添えられた詩にこう書かれている。

「自分の知識以外の何ものをも頼らずに、水の中を泳ぐ人間は以下のことを知らされる。何かを学んだ者にとつては、危急なときにはそれが助けとなる。知識は決して自分の主人を見捨てたりはしない¹⁹。」

つぎにジャック・ステラの詩(図22、一六五七年)を

紹介しよう。画面はすでに十人近くの子供たちが湖水の中で泳いだり、水を浴びたりしている。ひとりの子供が鼻をつまんで、ボートから飛び込もうとしている。

「皆は他の遊びで体が熱くなり、

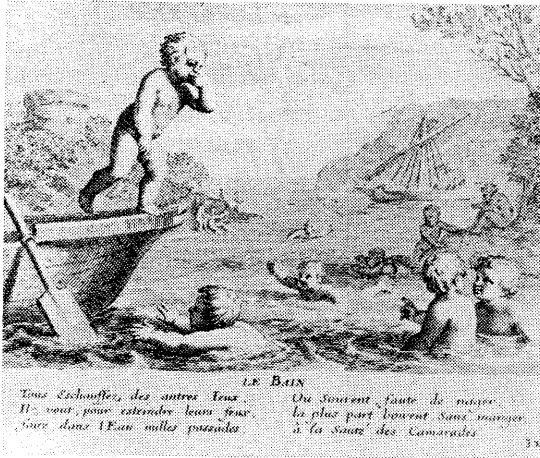


図22 クローディン・ブゾネ・ステラ「水泳ごっこ」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より) 銅版画

そのほてりを冷やすために、水中でもぐりごっこを何度もする。

もし時たま泳げないと、

金槌たちの大部分は「食事」もなしに、

仲間の健康を祝して「乾杯」することになる」^{注20}

ここで伝語の *Passades* を「もぐりごっこ」と訳した

が、この遊びは悪童たちが力づくで水の中へ相手の頭を押しつけて、自分の体の下を泳がせる遊びである。なお詩の後半は、泳げない者が沈んで水を飲んでしまう行為をユーモラスに表現しているのである。

「本連載をはじめて今回で九回目を迎えるが、91種類の子供の遊戯の約三分の二を終えた。そこでもう一度、ブリュッゲルの「子供の遊戯」のトレース(図23)を本誌に掲げるが、○内の番号は、各遊戯の番号に一致することを再度明記した
こゝ」

注1 Victor de Meyere, *De Kinderspeelen van Pieter Bruegel den*

Oude verkiand, Antwerpen 1941, p. 8.

注2 G. Hartmann en E. Lens, *Hetê Jôh!* Amsterdam 1976, p. 116.

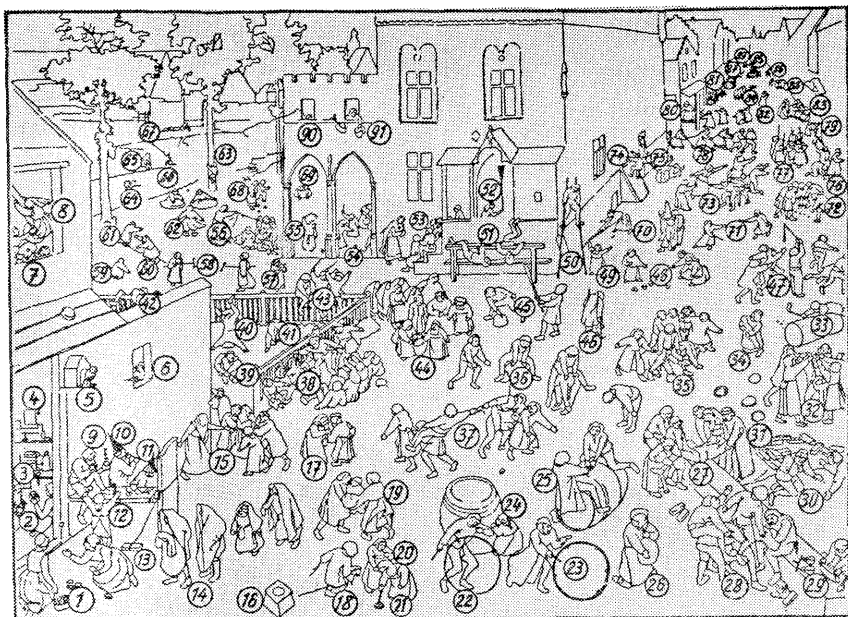


図23 ブリュエーゲル「子供の遊戯」(トレース, ド・マイヤー『子供の遊戯』1941年より, 注1参照)

- 註 9 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspel 1560*, Wien 1957, pp. 39-40.
- 註 4 Jacob Cats, *Kinderspel*, Saint-Omer 1855, pp. 82-84. (トランス)
- 註 10 F.A. Stoett, *Nederlandse Spreekwoorden, Spreekwijzen, Utdrukingen en Gezeden*, vol. 2, pp. 37-38.
- 註 9 G.A. Brederoo, *Moortje 1590. (De werken van G.A. Brederoo, Amsterdam 1887).*
- 註 7 *De Gewaande Weuenaar met het Badroge Kernis-Kind*, vol. III, p. 48.
- 註 10 P.J. Harrebomée, *Spreekwoordenboek der Nederlandse taal of verzameling van Nederlandsche spreekwoorden en spreekwoordelijke uitdrukkingen van vroegeren en lateren tijd door P.J. Harrebomée*, I, p. 327.
- 註 9 C. Ripa, *Iconologia of aybeeldinghe des verstands*, 1644 (reprint, Soest 1971), p. 479.
- 註 10 De Meyere, *op. cit.*, p. 9.
- 註 10 G. Glück, *Das grosse Bruegel-Werk*, Wien 1955, p. 55.
- 註 11 Hills, *op. cit.*, p. 38.
- 註 13 W.P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel vóór de Zeventiende Eeuw* (Dissertation), Leiden 1914, p. 41.
- 註 14 A. De Cock en Is. Reinheck, *Kinderspelen en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. I, p. 207 ff.
- 註 15 Hills, *op. cit.*, p. 39.
- 註 16 Glück, *op. cit.*, p. 56.
- 註 17 Rollenhagen 卷四十五, J. Balte, *Zeugnisse zur Geschichte unserer Kinderspiele* (Z. d. V. f. V.), Bd. XIX, 1909, p. 389 以下。
- 註 9 Roemer Vissecher, *Zinne-poppen*, Amsterdam 1614, *Profijt-lijf Vermaak*(Utrecht/Antwerpen 1968), pp. 112-113.
- 註 19 Vissecher, *ibid.*, p. 122.
- 註 20 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 32.

(東京工業大学)

『邦訳 日葡辞書』 ⑪

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

S字で始まる語

(承前)

スキ、ク (梳き、く)

(例) カミヲ スク (髪を梳く) 虱を取り除くために子供
の髪を梳く。

ステゴ (捨子)

捨てられた幼児。

T字で始まる語

タクタイ (托胎・宅胎)

ヤドリ ハラム (宅り胎む) 託身する、すなわち、ある人の胎内で人間の形をとる。一般に神や仏について言う場合に用いられるが、われらの主キリストに適用することがで

きる。

タイナイ (胎内)

ハラノ ウチ (腹の内) 腹の中。

(例) ハハノ タイナイニ ヤドル (母の胎内に宿る) 母親の腹中に在る、あるいは、居る。

タイランシツケ (胎卵湿化)

動物の生まれる四つの生まれ方。

1、タイシヨウ (胎生) そのもの本来の姿形をして、腹から生まれ出る、人間や動物の出生。2、ランシヨウ (卵生) 鳥や魚などのように、卵から生まれる動物の出生。

3、シッシヨウ (湿生) 湿気、または、腐敗から発生する動物の出生。4、カンシヨウ (化生) 水中に投げ込んだ頭髮とか、山芋などから蛇が生ずるように、変身(化成)によつて生ずる動物の出生。

タイシ (太子)

国王の子息。

タイシヨウ (胎生)

そのもの本来の姿形をして、腹から生まれ出る、人間や動物の出生。↓タイランシツケ、シシヨウ (四生)

タナマリ、ル、ツタ (たなまり、る、った)

母親の胎内に赤児が形成される。

タネ (種・胤)

種子。

(例) タネガ カワル (胤が変る) 二人、あるいは、それ以上の子供が、母親は同じで父親が違っている。

タンジャウ (誕生)

ウマレ、ルル (生まれ、るる) 出生。

(例) タンジャウ スル (誕生する) 生まれる、あるいは、分娩する。

タンジャウニチ (誕生日)

ウマルル ヒ (生まるる日) 出生の日。

タンジャウヤ (誕生屋)

出生の場所、または、ある人が分娩をした建物。

タノモシ (憑母子)

日本で行なわれる、仲間うちの契約の仕方的一种。また、損害を受けた人に、大勢の人々が貸付をしてやる、貸付法的一种。

タラチメ (垂乳女)

詩歌語。ハハ (母) に同じ。母。

タラチネ (垂乳根)

詩歌語。ヲヤ (親) に同じ。父母。

タラチヲ (垂乳男)

チチ (父) に同じ。父。

タワブレ、ルル、レタ (戯れ、るる、れた)

ひやかし、からかう、または、むつまじく遊びたわむれる、など。

タシヤウ (多生)

ゼンチョ (異教徒) が想像しているように、この世界に繰り返し生まれること。

(例) タシヤウノ キエン (多生の機縁) 他の生における結びつき、あるいは、つながり。タシヤウ コウゴウ

(多生曠劫) 多くの代を重ねて生まれること、あるいは、非常に長い時間にわたって血統が続くこと。↓キエン

(機縁)

タヤシ、ス、イタ (絶やし、す、いた)

血統などを中絶させる、あるいは、中断させる。

(例) シンソノ タヤス (子孫を絶やす) 血統、あるいは、ある宗派の分派を中絶させる、または、断絶させる。

タエ、ユル、エタ (絶え、ゆる、えた)

全くなくなる、中絶する、など。

(例) アトガ タユル (跡が絶ゆる) 嗣子や後継者がな

くなる。

タツサワリ、ル、ツタ（携はり、る、つた）

ある事に従事する、あるいは、手を取られる。

(例) ガクモンニ タズサワル（学文に携はる）勉学に専念する。

ツボネ（局）

ある主君の邸内の奥向き〔大奥〕を治める頭立った婦人。

ツボネ（局）

ある一人の婦人の住む、仕切られた房、すなわち部屋。また、婦人たちの居所、あるいは、寢室の意にも用いられる。

ツブテ（磔）

石を投げること。

(例) ムカイ ツブテヲ スル（向磔をする）互いに石を投げ合う勝負〔石合戦〕をする。

ツカイイレ、ルル（使ひ入れ、るる）

自分の使う者どもとか下男とかを、よく教え込み、教育する。

ツクリニワ（造園）

たくさんの小さな木や花や、またそれに類した物で人工的に造り整えた所。

ツクエ（机）

物書き台。

ツガイゴモノ（番小者）

揃いの仕着せを着て、馬とか輿とかの先に立って歩く二人の召使。

ツギ、グ、イダ（継ぎ、ぐ、いだ）

(例) アトヲ ツグ（跡を継ぐ）家を継ぐ、または、首長とか師匠とかなどの地位を継承する。

ツマ（妻・夫）

妻、すなわち結婚している婦人。また上記ほど正しい言い方ではないが、夫、すなわち、結婚している男子の意。

ツマブクロまたはコブクロ（つま袋または小袋）

婦人が、針などのような、いろいろな物を入れる小さい袋。

ツママレ（撮まれ）

馬鹿者、あるいは、愚か者、召使などをけなすのに言う言葉。

ツマミグイ（撮み食ひ）

食いしん坊などが、何かちょっとした物をこっそりとつまんで、あちらこちらで食うこと。

ツノリ、ル、ツタ（募り、る、つた）

増大する、または、柔らかで弱々しかった物が、強くなり、固くなる。

(例) カノ ワカイ ヒトハ イカウ ツノッタ（かの

若い人はいかう募った）あの若者は、なんと成長して雄々しくたくましくなったことか、などの意。

ツレ、ルル、レタ（連れ、るる、れた）

道連れになつて行く、または、連れて行く。

（例） コ、コモノヲ メシツレウズ（子、小者を召し連れうす）私は、息子、または若者を引きつれて行こう。

ツルノコ（雲孫）

曾孫（ひまご）の子。玄孫。

ツタエ、ユル、エタ（伝へ、ゆる、へた）

教義、技芸などを伝授によつて残す、あるいは、教授する。

ツタエキタリ、ル、ツタ（伝へ来たり、る、つた）

子々孫々に受け継がれて来る、または、次々に教授して来た人々の伝承によつて今日に至る。

ツワリ（悪阻）

妊娠した女の病氣。

ツツミカウ（鼓講）

鼓と呼ばれる楽器の打ち方を習う弟子の集会。

テカガミ（手鑑）

昔の有名な人々のすぐれた書の写しをたくさん一緒に綴じ込んだもの。

テダマリ（手溜り）

（例） テダマリニ ナイ（手溜りにない）何か物を抱きかかえる際に、それが非常に小さかったり、細かったりして、手に感じられない。

テマリ（手毬）

手でついて遊ぶ毬。

テナライ（手習ひ）

文字の書き方を習うこと。

テナライジョ（手習所）

文字の書き方を習う学校。

テナレ、ルル、レタ（手慣れ、るる、れた）

物を日ごろ手に持ちなれる。

（例） コノ モノドモノ テナレ モッタ アソビド

ウグ（この者共の手慣れ持った遊び道具）

テツケ、クル、ケタ（手付け、くる、けた）

ある人を自分の手許で育てる、または、その人を手なづける、など。

タウブク（当腹）

現在の妻の子ども。

タウゴマ（唐独楽）

子どもが遊ぶのに使う独楽の一種。

タウネンゴ（当年子）

今年生まれの子ども。とうねご、と発音される。九州方言の語。

トリアゲ、グル、ゲタ（取り上げ、ぐる、げた）

（例） コヲ トリアグル（子を取り上げる）子供が生まれた際に、父親代わり、あるいは、母親代わりとしての

役を引き受けるしとして、その幼児を腕に抱き上げる。

トリアゲオヤ(取上親)

子どもが生まれた際に抱き上げる父親代わり、または、母親代わり。

トリソダテ、ツル、テタ(取り育て、つる、てた)

(例) コヲ トリソダツル(子を取り育てる) 子どもを抱いたり、そのほかあらゆる事をしながら、扶養し育てる。

トリツタエ、ユル、エタ(取り伝へ、ゆる、へた)

相伝によって子から孫へと続けられる、あるいは、伝わって来る。

トト(とと)

父。これは子どもの使う語である。

タウシン(痘疹)

天然痘の病氣。文書語。

タウザイゴ(当歳子)

生まれて間もない、一歳に満たない幼児。

トゥザン(登山)

ヤマニノボル(山に登る) 子どもが読み書きを習いに坊主の寺へ行くこと。そして普通は三年経った後に、その寺から親が子どもを引き取るが、その時のことを下山すると言う。すなわち、読み書きを習った寺から出る、という意

である。

また、子ども以外の誰でも、人が寺、すなわち寺院へ行くこと。

V字で始まる語

ワカギミ(若君)

まだ幼い公子、すなわち、大身の主君の子息。

ワカゴ(若御)

高貴な人の幼い男の子。

ワカイ(若い)

新しく生まれた年齢の少ない(もの)。

(例) ワカイ ヒト(若い人) 十五歳から二十五歳前後

までの若者。

ワカミヤ(若宮)

皇子、すなわち国王の子息で、国王の位を継ぐべき人。

ワカモノ(若者)

青年。

ワカシユ(若衆)

若者。また、これに或る語を添えると、或る人が悪い事に使う若者の意。

ワツバ(わっぱ)

奉公人の若者。

ワキアケノソデ (腋開けの袖)

九州地方では振袖と言う。幼児の着物で腋に開いた口のあ
る袖。

ワラベまたはワランベ (童)

子ども。

ワラワ (童)

子ども、少年。また、小娘の奉公人。

(例) ワラワニナルまたはオオワラワニナル (童にな
る、大童になる) 人が頭髮を解き放し、すなわち、結び
を解いて、首筋のところにはらばらに乱す。

ウブカゼ (産風邪)

生まれたての赤子に起こる風邪の病氣。

ウブカミ (産神)

または産の神とも言い、むしろの方がまさる。ゼンチョ
(異教徒) の出生の神で、いわば彼らの守護のアンジヨ (天
使) のようなもの。

ウブカミ (産髪)

赤子をもって生まれた髪の毛で、まだ短く刈ったり剃った
りしない前のもの。

ウブカサまたはウブセ (産瘡、うぶせ)

赤子をもって生まれる頭のできもの。

ウブコ (産児)

今生まれた赤子。

ウブコエ (産声)

赤子が生まれる時に泣く最初の声。

ウブゲ (産毛)

二、三歳までの幼児に生えている、短くて柔らかい毛。

ウブギ (産着)

生まれるとすぐ赤子を包みくるむむつき。

ウブメ (産女)

出産で死んだ女の亡霊で、後まで残り留まっていると、ゼ
ンチョ (異教徒) が想像しているもの。

ウブヤ (産屋)

出生の家、すなわち、その中で人が生まれるために造られ
る家。

ウブユ (産湯)

生まれるとすぐ赤子を洗うのに使う湯。

ウイカムリ (初冠)

公家の若い息子が、その名前を変え、初めてとんがり帽子
〔冠〕を頭にかぶること。

ウイダチ (初立ち)

赤子が初めて足で立ったり、歩き始めたりすること。

ウイゴまたはウイノコ (初子、初の子)

初めて生まれる子ども。

新しい年が訪れる。然し、初日の輝きを手放して喜べないように思うのは、私ばかりではあるまい。地球も、日本も、そして幼児教育の先行きも、すべて手づまりに見える昨今、新しい年の訪れは、それだけ新しい難題を上積みすることにもなるだろう。

かつて、新しい年は、古い時間を葬ることで生まれ出るものであった。暦の更新は、時間の「死と再生」に機能し、世界をいま生まれ出たもののみずみずしさに、よみがえらせたのである。然し、現代において、新年とは、単なる慣習としての時の区切りに過ぎず、直進する時間の上の一点に過ぎない。従って、清算される機会を持たない古い課題は、山積みされたまま時の経過と共にその量を増して、私どもを脅かし続ける。時間が流れれば流れるほど、負の活力は増大し、世界中が抗しようもない重力にあえぎ続けている。

にもかかわらず、私ども幼児と関係を持つ者たちは、やはり、新しい年に希望を見る。今年こそよい年にしようと、健気な誓いをたてたりする。幼児教育の楽天性は、一体、どこからやってくるのであるうか。核の恐怖も、エントロピーの増大も、資源の枯渇も、無関心というのではないがそれほど気にならない。とにかく、今年一年を、目の前の子どもたちとどのように創り出していこうかと、ちえをしぼり、情熱を傾ける。こうした、無邪気なまでに楽天的・向目的な生き方は、何に支えられているというのか。

言うまでもなく、それは、子どもである。彼らは、とにかく、新しい。言葉の真の意味で、いま、生まれ出た存在であり、負の活力に染められていない。私どもは、今年もまた、子どもの傍にあることを感謝せねばならない。(H)

幼児の教育 第八十二巻 第一号

一月号 ©

定価三〇〇円

昭和五十七年十二月二十五日 印刷
昭和五十八年一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二一ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

好評発売中

幼児を のばす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

微妙で大切な保育の坎どころを、がっちりと読みとろう！

子どもたちに豊かな保育をと心をくだいておられる先生や、子どもがよくわからない、きつかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- ① 保育の視点 - ここがポイント 海 卓子・著
- ② 指導計画 - ここがポイント 高杉 自子・著
- ③ 絵画の指導 - ここがポイント 林 健造・著
- ④ 音楽の指導 - ここがポイント 早川 史郎・著
- ⑤ 体育の指導 - ここがポイント 三宅 邦夫・著
- ⑥ 自然の指導 - ここがポイント 小山 孝子・著
- ⑦ ことばの指導 - ここがポイント 阿部 明子・著
- ⑧ ごっこ遊び - ここがポイント 笠間 典美・著
- ⑨ 園 行 事 - ここがポイント 仲田あつ子・著
- ⑩ 母 親 対 応 - ここがポイント 本吉 圓子・著

B6判・セットケース入り・平均208頁・セット定価9,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

好評発売中

子どもの遊び

(全6巻)

○歳から三歳(3巻セット)

土屋多喜栄 丸尾ひさ

本吉圓子 田中文子 著

絵・浜田洋子 川上尚子 冬野いちこ

三歳から六歳(3巻セット)

本吉圓子 前典子 笠間典美

田中文子 矢作邦子 著

絵・ふじたひでみ 上條淳子 むかいながまろ

いずれもセットケース入

セット定価 各¥3,000円



0歳から6歳までの発達に
応じた基本的な遊びを
すてきなイラスト入りで
紹介。

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。

また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。

遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。



イラスト
浜田洋子

ワ、ワン、ムム コムにちは

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館